
遊 戯 王デュエルモンスターズGX † 輝石の騎士 †

ユウスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊 戯 王デュエルモンスターズGX 十輝石の騎士十

【Nコード】

N3524Y

【作者名】

ユウスケ

【あらすじ】

時は世界最強のデュエルキング・武藤遊戯が誕生してから数年後。その跡を継ぐ運命にありし者・遊城十代がデュエル・アカデミアに入学した。そして時を同じくして、一人のデュエリストが現れる。

輝石に奇跡が合わさり時、新たな煌きが次代を照らす。光り輝く軌跡となれ！

TURN - 01 遊戯を継ぐ者（前書き）

この小説では、生贄に捧げる「リリース。生贄召喚」アドバンス召喚。融合デッキ「エクストラデッキと、現在の用語に変換して連載します。

TURN - 01 遊戲を継ぐ者

日本の童実野町。時は既に正午を過ぎようと、太陽が街の真上を通過していた。そしてちょうどその頃、童実野町の一角に存在する海馬ランド。そこでは、デュエル・アカデミアの入学受験二次審査が行われていた。

海馬ランドは「海馬コーポレーション」の本社ビルがある施設内の大きなビルの天辺に建設された武道館で、入学試験は行われていた。

——受験番号10。三上信也くん。

放送で呼ばれた受験生がデュエルススペースへと向かっていく。そう、二次審査とはデュエル実技。そして、一次審査はカードの知識を知る為の筆記試験になる。デュエルススペースでは教師たちが、試験用に構築された専用デッキで受験生とデュエルし、その結果と仮定次第でアカデミアへの入学が決まる。

因みに、実技試験での受験番号は筆記試験での成績優秀者順に——から数字を振り分けて決まる。

——受験番号2。九条理人^{くじょうりひと}くん。

その放送で、真っ赤な帽子を深々と被った私服の少年が降りていく。その腕には白いデュエルディスクが装着されていた。

「おいおい。アイツ私服だぞ」

「中退か？　っていうか帽子とれよ」

「負けた時に顔を見られるのが恥ずかしいんじゃないの？」

客席で受験者を眺めている青い制服を着た在校生たちが口々に彼の悪口を口にする。

彼が聞こえているかどうかはわからないが、デュエルスペースに現れた彼は深々を被った帽子のキャップを左手で更に深くかぶっていた。

「ボンジョールノ！」

そういつて現れたのは青い外套を着込んだ金髪の外国人だった。

「あなたが九条理人でスーね？　話はちゃんとして聞いてルーノです」

「はい……」

理人は小さく頷く。

「あなたの相手は私わたくし、クロノス・デ・メディチ。実技担当最高責任者やってルーノです」

「お願いします……」

理人が左腕を構え、装着されたデュエルディスクを展開する

「デュエルコート、オン！」

クロノスも外套に装着したデュエルコートを機動し、胸部に装着したデッキから手札を五枚ドロースる。続いて理人もデッキから五枚カードをドロースる。

『デュエル!』

クロノス LP4000 VS 理人 LP4000

「僕のターン。ドロー」

理人は淡々とカードをドローし、手札のカードを一枚をデュエルディスクに置く。

「ジェムレシスを召喚」

理人の場にアルマジロに似たモンスターが^{ソリッド・ヴィジョン}立体映像として後ろ足で立ち上がって現れる。

「ジェムレシスの効果発動。召喚に成功し時、デッキからジェムナイトを一手札に加える」

『ジェムレシス 4 / 地属性 / 岩石族 / 攻1700 / 守500
/ 効果：このカードが召喚に成功した時、自分のデッキから「ジェムナイト」と名のついたモンスター一を手札に加える事ができる』

「僕は、ジェムナイト・ルマリンを手札に加える」

デュエルディスクからデッキを抜き取り、モンスターカードを一枚手札に加え、デッキをシャッフルしてデュエルディスクに戻す。

「そして^{マジック}魔法カード、^{デュアル・サモン}二重召喚を手札から発動」

理人はデュエルディスクに魔法カードを差し込み、理人の前に魔法

カードの立体映像が浮かび上がる。

「このターン自分は通常召喚を二回まで行っ事が出来る」

デュアル・サモン
『二重召喚』を場から墓地に送り、理人は手札からモンスターを
フィールドに出す。

「モンスターをセットし、カードを一枚セット。先行一ターン目は
攻撃できない……ターンエンド」

理人の前に裏側守備表示のモンスター一体と伏せられたカードが
一枚現れる。LP4000でフィールドにモンスター二体とリバー
スカード一枚で理人はターンを終了。

そのデュエルの様子を上から見守る二人の青い制服を着た生徒の
姿があった。

「へえ、あの子が受験番号2なんだ」

柵にその白い両腕を着いて、体重をかける金髪長髪の女性が理人
を見て微かな笑みを浮かべる。そしてその隣の長身の青年が理人に
視線を向ける。

「召喚したモンスターの攻撃力はそこそこ高い上に、守備モンス
ターと伏せカードもある。万全の布陣だ。だが問題は――」

「ええ、さっきサーチしてきたジェムナイトというモンスター。聞
いた事のないモンスターだわ」

二人は視線を鋭くして理人に注ぐ。聞いた事も無い名のカード。
その力を一つも見落とさないと云うかのように。

「校長先生は、あなたの実力を出来る限り全力で出させてあげなさい、との事でーすの」

「全……力……」

クロノスの言葉に、理人は俯いてしまう。

「……だめだ………そんなの………じゃない………」

「勿論、加減は自分でしても結構ですーノ」

ぶつぶつと独り言を繰り返す理人だったが、クロノスは気が付か無かったのか聞こえなかったのか理人にフォローの様な一言を入れる。

「………はい」

理人は小さくクロノスに頷いた。

「では、あなたの力を見せてもらいますーノ！ 私のターン。ドロー」

クロノスがデッキからカードを一枚ドローする。

「私は、ゴブリン突撃部隊を召喚！」

クロノスの場に武装した数体のゴブリンが一団となって現れる。

『ゴブリン突撃部隊 4 / 地属性 / 戦士族 / 攻2300 / 守0 / 効果：このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備

表示になり、次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更する事ができない」

「更に、手札から魔法カード、デュアル・サモン二重召喚を発動するノーネ」

「……！」

魔法カード『デュアル・サモン二重召喚』の効果で、クロノスはもう一度だけ通常召喚の権利を得る。

「私は、二体目のゴ布林突撃部隊を召喚するノーネ！」

クロノスの前に再びゴ布林突撃部隊が召喚される。

「そして永続魔法、連合軍を発動すルウウノ！」

永続魔法『連合軍』の効果は、自分フィールド上に表側表示で存在する戦士族モンスターの攻撃力を自分フィールド上に表側表示で存在する戦士族・魔法使い族モンスターの数×200ポイントアップさせる。

「私の場には、戦士族モンスターが二体いるノーで、ゴ布林突撃部隊の攻撃力は400ポイントアップし、2700となルウーのです！」

『ゴ布林突撃部隊』×2 攻撃力2300+400=2700

「そして、バトル！ 一体目のゴ布林突撃部隊で、ジェムレシスを攻撃！」

——ガハハハハハ！！

クロノスの号令で、ゴ布林達が『ジェムレシス』に襲いかかり、鉄の金棒でタコ殴りにする。『ジェムレシス』は辛そうな悲鳴を上げて碎け散った。

「……っ！」

その衝撃が理人を襲い、『ゴ布林突撃部隊』の攻撃力2700から『ジェムレシス』の攻撃力1700を引いた数値、1000ポイントが理人のライフポイントから引かれる。

理人 LP4000 - 1000 = 3000

「二体目のゴ布林突撃部隊で伏せモンスターを攻撃すルウーノ！」

——ゼハハハハハ！！

クロノスの号令で再びゴ布林達が襲いかかって裏側表示のモンスターが表側表示になり、エメラルドの甲羅を背負った陸ガメが姿を現す。

『ジェムタートル 4 / 地属性 / 岩石族 / 攻 0 / 守 200』

しかし、『ゴ布林突撃部隊』の攻撃力に守備力が足りずに光となつて破壊される。

「守備表示モンスターは戦闘で破壊されても、戦闘ダメージはない。そして、ジェムタートルのリバース効果、発動」

再び『ジェムタートル』のカードがフィールドに現れる。

「自分のデッキからジェムナイト・フュージョンを一枚、手札に加える」

理人はデッキから魔法カードを手札に加え、シャッフルして元に戻す。

「ゴブリン突撃部隊は攻撃したバトルフェイズ終了時に守備表示になる。カードを一枚伏せてターンを終了するノーネ」

クロノスはLP4000の状態で、守備表示モンスター二体と伏せカード一枚でターンを終了し理人にターンが回る。

「僕のターン。ドロー」

デッキから一枚カードをドローする。それを見て、理人は僅かに笑みを浮かべる。

「僕は……このターンで決める」

「何ですト？」

クロノスは理人の言っている事を理解できず首をかしげる。いや、理解はできているが納得できないという事だろう。

「僕は、ジェムナイト・フュージョンを発動！」

理人はデュエルディスクに魔法カードをセットし、フィールドにそのカードが現れる。

「ジェ、ジェムナイト・フュージョン？　なんですか、ソレ？」

「ジェムナイト・フュージョンは、ジェムナイトと名の付いた融合モンスターを融合召喚する専用カード。僕は、手札のジェムナイト・サファイヤとジェムナイト・ルマリンを、融合！」

宝石のイエロートルマリンとサファイヤが互いに重ね合わさり、火花を散らしながら回転し、互いに碎け散る。

「輝石と輝石が研磨されし時、新たな輝きを呼び起こす。光り輝く道となれ！」

理人が右手を翳すと同時に碎け散った二つの宝石が一点に集束されていき、やがて一つの宝石——トパーズとなってフィールド上に舞い降りる。

「融合召喚！　現れよ、ジェムナイト・パーズ！」

トパーズが碎け、その中から黄色い甲冑を身に纏い逆手持ちダガーを両手に所持した輝石の騎士が現れる。

『ジェムナイト・パーズ　6 / 地属性 / 雷族 / 攻1800 / 守1800　融合「ジェムナイト・ルマリン」+「ジェムナイト」と名のついたモンスター。このカードは上記のカードを融合素材にした融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚する事ができる』

「何て綺麗なモンスターなの……」

「ジェムナイト・パーズ……宝石のトパーズをあしらったモンスターという訳か」

上階で見ている二人の男女が口を揃えてその美しさに見惚れる。
だが……

「攻撃力1800？ 雑魚じゃん」

「うわ、見た目だけかよ。しかも口先だけ」

「フン。やっぱり雑魚には雑魚がお似合いだな」

などと言い出す生徒たち。しかし理人はそんな事は気にしない。

「僕は手札から装備魔法、フュージョン・ウェポンをパースに装備」

理人がカードをデュエルディスクに差し込むと『ジェムナイト・パース』の右腕がレーザー砲の様に変化する。

「このカードはレベル六以下の融合モンスターにのみ装備可能。そして、装備したモンスターの攻撃力を1500ポイントアップさせる」

『ジェムナイト・パース』 攻撃力1800+1500＝3300

「何ですト！？」

「バトルフェイズ！ パースでゴブリン突撃部隊を攻撃！」

『ジェムナイト・パース』がゴブリン達へと一気に駆け出す。

「ジェム・レーザーブレード！」

——おおお!!

変化した腕を振り上げて光の剣が出現し、『ジエムナイト・パーズ』がそれを勢い良く振り下ろして『ゴ布林突撃部隊』を一閃する。光の剣に切り裂かれたゴ布林突撃部隊は砕け散る。

「ぬぬぬのヌ!」

「そしてパーズは、戦闘によってモンスターを破壊し墓地に送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える」

「な、なにイ!?!」

「破壊したゴ布林突撃部隊の攻撃力は2300。よって、2300のダメージが与えられる。ジエムフラッシュ!」

——せええええ!!

『ジエムナイト・パーズ』が身体全体から金色の輝きを放つ。

クロノス LP4000 - 2300 = 1700

「ですが、次のターンでそのモンスターを破壊する方法が、私の手札には既にあるノーネ。問題ないノーネ」

「いや、このターンで終わりだと言った筈」

「なっ……!?!」

「パーズは一度のバトルフェイズ中に二回攻撃ができる!」

「私の場には、ゴブリン突撃部隊が守備表示で存在しているノオです……」

「しかし、パースは破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える効果がある」

クロノスの目の前で、『ジェムナイト・パース』が再び腕を振り上げ、勢い良く振り下ろしてゴブリン突撃部隊を破壊する。

「リバースジェムスラッシュ！」

そしてライフポイント1700のクロノスは、ゴブリン突撃部隊の攻撃力2300ダメージを受け――

「ジェムフラッシュ！」

――はああああ！！

『ジェムナイト・パース』が両腕を広げ、その身の輝きをフィールド一杯に解き放つ。

「ノオオオオ！！」

クロノス LP0

「デュエル・エンド。僕の勝ちだよ」

理人はデュエルディスクの墓地とフィールドのカードをデッキに戻し、デュエルディスクを停止させる。それと共に立体映像が消

ソリッド・ヴィジョン

えていく。

「よく伏せカードを警戒せずに攻撃できマ―したネ。もしこれが聖なるバリアーミラーフォース―だったら、勝っていたのは――」

「伏せカードは永続罠、^{トリック}最終突撃命令」

「ぬ……」

「デメリットアタッカーを主軸としたデッキを回すには必須カード。そして――」

『ゴブリン突撃部隊』を初めとして、攻撃後に守備表示になるデメリットアタッカーは高い攻撃力の代わりに守備力は低くなっている。守備表示になっている時を攻撃されれば、彼らは高い攻撃力をいかせない。そして『最終突撃命令』は、フィールド上の表側表示のモンスターは全て攻撃表示となる永続罠。

「攻撃力が低いモンスターで攻撃してきた時、最終突撃命令を発動する事でゴブリン突撃部隊は攻撃表示となり、ダメージ計算を行う。ゴブリン突撃部隊などのデメリットモンスターにとってこれ以上に無い罠」

「フムフム……」

「それになにより。こちらが攻撃宣言しても罠を発動させなかったのがその証拠。アレを使えば、場のモンスターは全て攻撃表示となってしまうからね」

クロノスは理人の解説にウンウンと頷いて見せる。

「例え万が一違ってても、伏せカードは……」

理人はデュエルディスクから抜き取っていなかった一枚のリバー
スカードを抜き取り、クロノスに見せる。そのカードとは――

「盗賊の七つ道具。1000ポイントのライフを払う事オーで、相
手の罠カードの発動と効果を無効にして破壊するカウンター罠。な
るホドなるホド。聞いた通りの実力者なノーネ。これにて、試験デ
ュエルは終了なノーネ」

「ありがとうございました」

理人はクロノスに頭を下げて上へ戻っていく。クロノスはその後
ろ姿を最後まで見つめてから、自分も審査室へと戻っていく。

そしてその様子を上から見下ろしていた二人の男女。

「彼は間違いなくラー・イエローで合格だな。そして直ぐにオベリ
スク・ブルーに入ってくるだろう」

「でしょうね。にしても、ジェムナイト・パーズ……か。やっぱり
聞いた事も無いカード。彼はほとんどそのカードを使うことなく勝
つてしまったし、もう少し見てみたかったけど」

女性は残念そうに呟く。それを聞いて、隣の男性が不敵な笑みを
浮かべる。

「フツ……。俺は戦ってみたいけどな」

「あら、カイザーと呼ばれる貴方が進んで戦いたいなんて、珍しい。

でも、私も戦ってみたいわ」

二人がそんな風に会話をしている間に、理人とはば同時に始まっていた受験番号1の三沢大地の試験デュエルが終盤を迎えようとしていた。

「如何に優秀なキミでも、この超守備デッキの前に、私のライフをこれ以上削る事は出来ない」

そういう教師のフィールドには魔法・罠はなく、守備力2600の『ビック・シールド・ガードナー』と2200の『機動砦のギア・ゴーレム』が守備表示で存在している。対して三沢大地のフィールドには伏せカードが一枚と攻撃力1900の『ブラッド・ヴォルス』が一体のみ。

普通に考えれば、守備力に遠く及ばない『ブラッド・ヴォルス』では勝てないと思うだろう。しかし――

「^{トラップ}罠カード、破壊輪、発動！」

三沢大地は伏せカードをオープンする。

「んなっ！」

教師が驚愕する中、三沢大地はこの罠カードの説明を始める。

「この罠カードは、フィールド上の表側表示で存在するモンスター一体を選択して破壊し、お互いにそのモンスターの攻撃力分のダメージを受ける」

『ブラッド・ヴォルス』の首に手榴弾の輪が装着され、一気に爆

破。そして、その攻撃力がお互いのライフポイントから引かれる。

教師 LP1900 - 1900 = 0 三沢 LP3000 - 1900 = 1300

「試験デュエル終了。おめでとう、君の勝利だ」

「ありがとうございました」

三沢は教師に頭を下げて上に戻っていく。そしてその様子を上階のベンチに座って数人の生徒が見下ろしていた。

「受験番号1番の三沢大地は、なかなかやりますね」

「噂を聞いて、わざわざ見に来た甲斐がありましたね。万丈目さん」

二人の生徒に挟まれ、敬語を使われている黒髪の生徒は鼻で笑い飛ばす。

「ナンセンス。所詮入試デュエルなど、レベルを低く設定されているもの。学園から出てきて損したぜ」

うんざりした様な表情をする万丈目と呼ばれた生徒。

「だが――」

万丈目は獰猛な目つきを会場の一角に向ける。そこには、先ほどクロノスを破った理人の姿があった。

「無駄足にはならなかったようだ。しかし、デュエル・アカデミア

にキングは二人もいない。オレがオンリー・ワンだ」

ギラギラした目を感じたのか、理人はその視線から逃げるように帽子を更に深く被って移動し始める。

「あの一番、見事なコンボだったな」

「そりゃそうさ。受験番号1番、つまり筆記試験第一位の三沢君だよ」

「ふうん。受験番号はそういう意味か」

理人が歩いていると、ふとそんな会話が聞こえてきた。その方向に目を向けてみると、やはりそこには見覚えのない中学の制服を着た身長差のある二人が話していた。

「合格は筆記の成績とデュエルの内容で決められるんだ。デュエルには何とか勝ったけど、受験番号119のボクじゃ受かるかどうか……」

「心配すんな！ 運が良ければ合格するさ。オレだって110番だ」

と背の高い方の少年が背の小さい少年の背を叩いて励ます。

「キミも受験生だったの？」

「ああ！」

「でも100番台のデュエルは一組目でとっくに終わってるよ」

と、背の小さい少年が言うと、背の高い方の少年はズッコケた。

「ふふふ」

「ん？」

漫才の様な流れの会話に、思わず笑ってしまった理人。

「ごめん。テンポのいい会話だったからつい……笑ってごめん」

「別にいいよ。アンタも受験生？ 私服だけど」

「そうだよ。中学校には通ってなかったけどね」

「さっきデュエルしてた受験番号2番の人……ですよね？」

「あ、うん。そうだよ」

理人は戸惑いながらも頷く。

「あのジェムナイトってカード見た事も聞いた事も無いけど、どんなカードなの？」

「今は秘密、かな。約束なんだ、ごめんね」

「そうなんだ」

そんな会話をしている間に、三人の前の座席に先ほどデュエルを終えた三沢が戻ってきた。その三沢に、受験番号110が声をかける。

「すつげえ強いなお前」

「ああ」

「今年の受験生で、二番目ぐらい強いかもな」

その一言に、三沢も理人も受験番号119番も反応し、言い返そうとしたまさにその時。

——受験番号110、遊城十代くん。

「よし、オレの番だ」

放送が掛けられて、受験番号110番——もとい遊城十代はデュエルフィールドへと降りて行こうとする。

「キミ」

「ん？」

「なぜ、僕が二番なんだ？」

「一番は、オレだからさ」

そう自信満々に言うと、十代は降りて行っ

た。
「ボクより筆記試験の成績が九番良いだけでなんであんなに自信が持てるんだろ？ 羨ましい……」

受験番号119番が今にも口に指を咥えそうな表情でそう呟く。

(おい)

「……！」

理人の心に自分と同じ声が響き、語りかける。

(お前も感じたか？ あの底なしの様な力をよお)

その声に、理人も応える。

(うん。まるで、全てを包み込む様な包容力だった。彼も、僕と同じ様な力を持っている？)

理人は目の前で、自分が戦ったクロノスと十代のデュエルが始まるうとしていたのを見つめながら、自分の心と語り合う。

(さあな。ホラ、デュエルが始まるぜ？)

その言葉を最後に声は聞こえなくなり、同時に十代とクロノスとのデュエルが始まった。

十代が先行でドロし、ドロしたカードをデュエルディスクに置き、十代の前に緑色の鳥獣をモチーフにしたHEROが身を守る格好で現れる。

エレメンタル・ヒーロー

『E・HERO フェザーマン 3 / 風属性 / 戦士族 / 攻1000 / 守1000』

更に十代のフィールドに伏せカードが出現し、十代がターンを終了する。

（先手としては悪くない。様子見って所かな？）

クロノスがデッキからドロし、そのまま少し思案する。

（僕の際は攻撃型のデッキだったけど、今度のデッキは……）

クロノスは手札から魔法カード『押収』を発動する。

「押収は、相手の手札を見て一枚を墓地に送る魔法カード。だがその代償に発動コストとして1000ポイントのライフを支払う。試験に使うようなカードじゃないぞ」

三沢が表情を一瞬だけ固くしながらもカードの解説をする。その説明に受験番号119番は「へえ」と関していた。

その間にクロノスは十代の手札から魔法カード『死者蘇生』を墓地へ送らせる。そして次にカードを二枚セットし、魔法カード『大嵐』を発動する。

「大嵐は、フィールド全体の魔法・罠をすべて破壊するカードだ」

「大嵐の発動前にカードをセットしたって事は、あのコンボを……」

フィールドの罠が全て破壊され、クロノスのフィールドに黄金の邪神トークンが現れる。それと共に会場がどよめく。

「何がどうなってるのかさっぱり……」

その中で理解できていない受験番号119番。

「さっきクロノス先生が破壊した自分の罠カードは、黄金の邪神像」

「黄金の邪神像は破壊された時、邪神トークンを特殊召喚するという特殊な罠^{トリック}。その効果は破壊されないと発揮されないが、破壊さえされればさつきセツトしたとしてもその効果を使う事が出来るんだ」

「へえ……」

「常識だよ？ 受験番号119番」

「う……」

理人の一言に胸を押さえて呻く受験番号119番。だがデュエルは続く。クロノスは二体の邪神トークンをリリースし、最上級モンスターを召喚する。

召喚されたモンスターは――

アンティーク・ギアゴーレム
「古代の機械巨人……。伝説のレアカードだ」

アンティーク・ギアゴーレム
『古代の機械巨人 8 / 地属性 / 機械族 / 攻3000 / 守30

00 効果 / このカードは特殊召喚できない。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、このカードの攻撃力が守備表示モンスターの守備力を超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。このカードが攻撃する場合、相手はダメージステッ
プ終了時まで魔法・罠カードを発動できない』

アンティーク・ギアゴーレム
クロノスが古代の機械巨人で攻撃を行い、『E・HERO フェ
ザーマン』を吹き飛ばす。

アンティーク・ギアゴーレム
「古代の機械巨人は3000。フェザーマンの守備力は1000。
敵いっこないよ！」

「それだけでは済まないさ。このモンスターは、守備表示モンスターを攻撃した時、攻撃力が守備表示モンスターのその守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手にダメージを与えるんだ」

「そんなっ！？ 掟破りモンスターじゃないか！？」

「しかも、あのモンスターは攻撃する時、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できなくなる効果を持つてる」

「なっ！？ 掟破りにもほどがある！！」

受験番号119番が驚愕の声を立て続けにあげる。だが、三沢と理人は特に驚く事も無く十代のデュエルを見続ける。

だがこれで十代のライフポイントは4000から2000に減った。しかし、次は十代のターンでカードをドロ―。

「一体どうやって攻略する気なんだ？」

会場の視線が十代とクロノスのデュエルに集中し、その一挙手一投足を見落とさないように注意深く見つめる。そしてその視線の先で、十代は羽の生えたクリボーを守備表示で召喚する。

『ハネクリボー 1 / 光属性 / 天使族 / 攻300 / 守200』

「あのカードは！」

「あれ？ あのカード知ってるの？」

理人が帽子の奥で目を見開く。そしてそのままクロノスのターンに回り、バトルフェイズ以降。『アンティーク・ギアコーレム 古代の機械巨人』が『ハネクリボー』を破壊する。

だが、十代のライフポイントに変化はない。

「ハネクリボーは破壊された時、このターンに受ける戦闘ダメージを全て0にする効果を持つ。だからこのターン、受験番号110番のライフは減らない」

「凄い効果だ」

受験番号119番が『ハネクリボー』の効果に感心する。だが感心している間に、十代が罠カード『ヒーロー・シグナル』を発動する。その効果は、自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動し、自分の手札またはデッキから『E・HERO』という名のついたレベル四以下のモンスター一体を特殊召喚する。

十代はデッキから『E・HERO バーストレディ』を特殊召喚する。

『E・HERO バーストレディ 3/炎属性/戦士族/攻1200/守800』

そして十代のターンに回り、ドロウする。更にそこから魔法カード『戦士の生還』を発動し、墓地から戦士族モンスター一体『E・HERO フェザーマン』を手札に加え、そのまま召喚。そして更に魔法カード『融合』を発動する。

「来た」

手札、または自分フィールド上の融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスター、『E・HERO フェザーマン』と『E・HERO バーストレディ』を墓地に送り、その融合モンスター一体をエクストラデッキから融合召喚する。

『E・HERO フレイム・ウィングマン 6/風属性/戦士

族/攻2100/守1200 融合「E・HERO フェザーマン」
+「E・HERO バーストレディ」[㊦]

「格好いい……」

「フレイム・ウィングマンは、融合召喚でしか特殊召喚できない。
戦闘によって破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手
に与える事ができる」

「でもさ、フレイム・ウィングマンの攻撃力は2100。^{アンティーク・}古代の機械巨人の攻撃力には届かないよ」

「いや、彼はこのターンでクロノス先生を倒すよ」

理人が言った台詞に、三沢も受験番号119番も周りの生徒も理人に振り返る。

「彼が次に使うカードは、フィールド魔法、摩天楼 スカイスクレイパー！」

理人が言った通り、十代の言葉に合わせるかの様にフィールド魔法カード『摩天楼 スカイスクレイパー』を発動し、二人のフィールドが夜の摩天楼に姿を変える。

「このフィールドでは、E・HEROと名の付いたモンスターが戦^{バトル}闘する時、相手モンスターの攻撃力よりも低い場合、攻撃力がダメージ計算時のみ攻撃力が1000ポイントアップする」

「っ！？」

十代が『E・HERO フレイム・ウィングマン』で攻撃宣言し、
アンティーク・ギアゴレム『古代の機械巨人』に攻撃を仕掛ける。『E・HERO フレイム・ウィングマン』の攻撃力がスカイスクレイパーの効果で攻撃力が3100に上昇。
アンティーク・ギアゴレム『古代の機械巨人』の頭上から炎を纏って体当たりして大爆発する。

クロノス LP2900

そしてこれで『E・HERO フレイム・ウィングマン』の効果が発動する。破壊したモンスターの攻撃力分、3000の効果ダメージが
アンティーク・ギアゴレム『古代の機械巨人』の瓦礫の雨となってクロノスに降り注ぎ、クロノスはその瓦礫の下敷きになる。

クロノス LPO

「いいぞおー！ 110番！！」

受験番号119番が歓声を上げ――

「良きライライバルになれるかもしれないな。一番君」

三沢が小さくそう呟き――

「遊城……十代……か」

理人は一人、喜びを全身で表現する十代に視線を向けながら微笑んだ。

（面白い子と出会ったね。レイ）

（ああ、アイツとは戦い甲斐がありそうだな、リト）

理人の深々と被る帽子の奥で、真紅の瞳が一瞬だけ瞬くように赤く光を反射したような気がした。

TURN・01 遊戯を継ぐ者（後書き）

次回予告

十代

「おもしれえ！おもしれえ！おもしれえ！デュエルって楽しいよな。な！」

翔

「う、うん……」

十代

「なに暗い顔してんだよ。俺たちデュエル・アカデミアに受かったんだぜ？」

翔

「うん、そうだね」

十代

「ほら、クロノス先生も凄かったけど」

翔

「三沢君も、理人君も。きっとデュエル・アカデミアにはもっともつと強い人がいるよ」

十代

「そっかあ！ そうだよな、楽しみだぜ！」

翔

「次回は、フレイム・ウィングマン。っすよ」

次回 TURN - 02 フレイム・ウィングマン

???

「次回は俺が登場だ！ 誰だかわかるかな？」

十代

「あ、あれ？ お前、どっかで見た事……」

TURN・02 フレイム・ウィングマン

デュエル・アカデミア本校は、地球の南半球にある小さな孤島にある。そこでは生徒は三つの寮に合わせた制服で分けられる。一つはアカデミア中等部からの成績優秀者が入るオベリスク・ブルー。一つは高等部の入試試験を好成绩で終えた者が入るラー・イエロー。そして最後に落ちこぼれが入るオシリス・レッド。

そして秋の途中入学で入学が決定した生徒たちが、振り分けされた制服を着て一年生の教室に集まっていた。教室は組み分けされておらず学年で分けられている。結果、一つの教室が大学の教室ほど広い。

『ようこそ、デュエルエリート の諸君』

新規入学した生徒たちの前のモニターにアカデミア本校の校長の姿が映し出された。不精髭を生やした禿げ校長だった。

『諸君は狭き門を實力で開いてやってきてくれました。未来のデュエルキングを目指して、楽しく勉強してください』

それだけ言うと校長先生の挨拶は終わり、その後も淡々と式は進みあつという間に終わってしまった。

式が終わり、各寮での歓迎会があるそうだがそれまで時間がある為、それまで自由時間という事になった。そして此処に一人、やる事が無くてただ一人で突っ立っている黄色い制服を着て紅い帽子を深々と被る理人がいた。

「やあ、久しぶりだね。二番」

「え？」

理人は声を掛けられて振り返る。そこには、受験会場で知り合った三沢大地が立っていた。その身に纏っているのは黄色い制服。

「君は……」

「僕は三沢大地。君と同じラー・イエローだ。よろしく」

「うん。よろしく、大地くん。僕は九条理人」

理人と三沢は握手を交わす。

「理人、か。君のデュエル、僕は見られなかったけど楽しみにしてるよ」

「ありがとう」

理人は三沢と共に校舎から出ていく。行くべき寮は同じなのだから当然である。

「ところで、君は帽子を取らないのか？」

「あ、この帽子は……」

理人は帽子のキャップを握ると、しばらく無言になり更に深々と被る。

「……………」

「……………ああ、悪い。取りたくないなら取らなくていいから」

三沢は苦笑いしながら前言を撤回する。

「……………ごめん」

理人は本当に申し訳なさそうに謝る。

「いや、僕が無神経だった。その帽子は大切なモノなのか？」

「そういう訳じゃ……………ないんだけど……………取りたくないんだ」

「そうか」

そこまでで帽子の話は終わり、校舎の外に出てきた。

「やあ二番。お前もレッドか？」

その声に二人が振り替えると、その近くの碑石には腰かけた遊城十代と受験番号1119番が居た。

「いや、この制服でわかるだろ。僕はラー・イエローだ」

「制服の色って、そういう意味だったのか。あ、じゃあアンタもイエローか」

「そうだよ。遊城十代くん」

そう理人が言うと、十代は首をかしげた。

「あれ？ オレってお前に名前教えたっけ？」

「試験デュエルで呼ばれた時に覚えたんだよ」

「そうなのか」

十代は「なるほど」と納得すると、碑石から立ち上がって理人に向き直る。

「んじゃ、改めて自己紹介な。オレは遊城十代。十代って呼んでくれ」

そう言つて十代は屈託の無い笑顔で右手を差し出してくる。理人は若干戸惑いながらもその手を取る。

「僕は、九条理人」

「理人か。よろしくな、理人！」

「よろしく、十代くん」

「おう！」

えへへ！と笑う十代だったが、ふと何かに気づいて首を傾げるように理人の顔を覗き込む。

「な、何？」

「へえ……。理人って綺麗な眼の色してんだな！」

「なっ……!？」

あまりにも唐突な事を満面の笑みで言われた理人は思わず身を引いて固まる。

「どうした？」

「い、いや、そんな風に眼の色を褒められたの……生まれて初めてだったから」

帽子を深々と被って俯き、誰が見ても恥ずかしそうにしているのがわかり、三沢も十代も笑う。

「しかし、君がどうしてレッドなのか不思議だよ」

「む。なんだか引つ掛かる言い方だな」

「ま、気にしない事だ。それじゃ失敬するよ、一番君」

「それじゃあね」

三沢と理人は軽く手を振って去る。

「おう。お前こそ落ち込まず頑張れよ！」

「そうそう。君たちの寮はあっちだよ」

三沢はそう十代達に言って、理人と共にラー・イエローの寮に向かう。

因みに寮はオベリスク・ブルー、ラー・イエロー、オシリス・レ

ツドの順番でランク付けされており、オベリスク・ブルーが一番待遇が良く、住む部屋も食べる料理も豪華なモノばかり。そしてラー・イエローがこのアカデミアでの基準となる生活水準となるが、それでもかなり優遇されている。だがオシリス・レッドだけは、普通校とほぼ同等の部屋に、食べ物も精々一般の食卓が単純になったレベル。つまり、オシリス・レッドは色んな意味での底辺という事だ。そうこうしている間に、二人はラー・イエローの寮にたどり着いた。

「ここがイエローの寮か」

「うわ、これでイエロー。だとしたらブルーってどれだけ凄いなんだろう」

イエローの大きくとも綺麗な外観の寮に、理人はブルーの寮を思い浮かべる。

「多分、城とかじゃないか？」

「……鼻屑とか差別が可愛く思えてきそうだよ」

「ははは、確かにな。ま、とりあえず中に入ろう」

「うん」

理人は三沢の後に続いてラー・イエローの寮の中に足を踏み入れる。

「さて、まずは自分たちの部屋に行こうか」

「うん」

三沢と理人は、デュエル・アカデミアの生徒証となるデジタル端末を開き、自分のパーソナルデータを開く。

理人の画面には209号室と表示され、三沢の画面には101号室と表示された。

「どうやら僕らの部屋は端と端の様だな」

「みたいだね。荷物はもう運び込まれてる筈だから……とりあえず荷物の整理かな？」

「そうだな。それじゃ、歓迎会でな」

「うん。またあとで」

三沢と理人はそう言って、三沢は通路を右へ、理人は通路を左へ進みその先にある階段を上る。二階に上がって暫く歩くと、理人はすぐに自分の部屋を見つけた。制服と一緒に渡された寮のカードキーでドアロックを解除し、中へ入る。

そこは、一人暮らし出来るマンションの一部屋ぐらいの広さがある部屋だった。ベットや机は勿論、更にパソコンまで備え付けの部屋だった。

「うわぁ、結構広いな。流石は海馬さんの建設したアカデミアだね」

理人は一人で誰かに語り掛ける様に言う。誰も応える訳がない筈だが、彼にしか聞こえない声——何時の頃からか存在するもう一つの人格、レイ。

（そうかあ？ 俺にはちょっと狭いんだがなあ。瀬人の野郎、ケチケチしやがって）

彼は理人とは真逆でとても荒々しい印象が強く、運動、勉強、デユエルと全てが理人よりも上だ。

「そんな事言つてると、また海馬さんに滅びのバーストストリーム三連射を喰らうよ？」

理人が溜息を吐きながら言う。だが、理人にだけ聞こえる声は臆する事無く言い切る。

（ハッ！ 今度は俺があドラゴンの白い龍を黒く塗り潰してやるよ。待つてろよ。青眼ファイズバカ！）

「あははは………アレを浴びるのは僕なんだけどなあ」

理人は彼が興奮しているのを苦笑いしながら既に運び込まれている自分の荷物の整理を始める。

理人が荷物の整理を始めて数時間後。既に太陽は完全に沈み、世界は闇に包まれていた。

「……ふう、終わった」

理人が荷物の整理を終えて一息吐く。ふと部屋に備え付けられている時計に目を向けるデジタル時計には既に「6：55」と表示されていた。理人は「あれ？」と首を傾げて、今日の予定を端末で確

認する。

するとそこには、歓迎会の開始は七時と表示される。

「うわっ！ もう行かないと遅れるよ！」

理人は部屋を出ると、急いで食堂へ向かう。その通路にはもうラ
ー・イエローの生徒の姿は見えない。

（ははは！ 逃げ逃げ！ じゃないと食いつぱぐれるぜ！）

「もう！ 自分は見てるだけだからって！」

理人は見えないもう一人に向かって文句を叫びながら食堂へ急ぐ。
階段に差し掛かり、理人はその階段の手すりを睨みつける。

（チェンジだリト！ 飛び降りるぜ！）

（うん！ 頼んだよ、レイ）

理人は一瞬目を瞑り、再び目を開く。その目つきは鋭くなって口
元に笑みを浮かべる。

「はっ！」

走っている勢いのまま、手すりに右手を着いて、右手で体重を支
えながら手すりを飛び越える。そのまま重力に従って理人は階下に
ダンッ！と降り立つ。

「んじゃ、後は任せたぜ」

理人は再び目を瞑り、再び目を開いた時には鋭い目つきは無く
なり、元の儚げな色を宿した目に戻っていた。

理人そのまま走りだし、なんとかギリギリ食堂に間に合った。

「やあ、理人。遅かったな」

一足早く来ていた三沢が理人に声をかける。理人は三沢の傍まで
来ると、恥ずかしそうに答える。

「ちょっと、荷物の整理に手間取って……」

「そうか。まあとりあえず座った方がいい。そろそろ歓迎会が始ま
るからな」

「あ、うん」

理人は空いている三沢の隣の席に腰かける。するとすぐ寮長から
の挨拶が始まった。

「えー、私がこのラー・イエローの寮の寮長をしている樺山かへやまです。
新入生の皆さん、ラー・イエローによろこ。これから三年間、こ
のアカデミアでの生活を楽しんでください」

無難な挨拶が終わり、合掌と共に食事が始まった。

ラー・イエローの歓迎会で出された料理はどれもパーティーで出る様な豪勢なモノばかりだった。そして、その寮の歓迎会が終わったのは午後九時の十分前。理人は食事もそこそこにして自室に戻ってきていた。

「ふう……」

ラー・イエロー寮の部屋にはシャワールームが備え付けられており、理人はシャワーを浴びてからラフな服に着替えて、ベットに仰向けに倒れ込んだ。勿論、その状態でも例の帽子は被ったままである。

（なんだ？ 疲れたのか、リト）

ベットに倒れ込んだ理人にまたレイの声が響く。

「うん。今日は、かなり疲れたよ。もう寝てもいいかな？」

（おう。就寝まで俺が表に出てるぜ）

「それじゃあ、よろし……く……」

理人はゆっくりと瞳を閉じ、数秒後。理人はレイとして目を覚ました。

「さてつと」

レイは足を振り上げ、ベットから勢いよく跳び降りる。そのままクローゼットに向かい、ラフな格好から制服に着替える。だが、そ

の制服に袖を通す事はなく、ただ肩の上に羽織るだけ。

そして部屋の電気を消し、部屋の窓の前まで歩いていくと、一気に窓を開け放つ。窓を開けると共に夜の涼しい風が部屋の中に流れ込み、レイの頬を撫でる。

「……良い風だ」

そう呟いてレイは今まで理人が深々と被っていた帽子を取り払う。その帽子の下に隠されていた髪が月光の光に照らし出される。

その月光に照らされた髪は長く、その長さはどうやって収まっていたのかと思うぐらいで背中まで届くほどで、フワリと夜風になびく。そして、その髪の色は瞳と同じ――

――血の様な赤。

「んじゃ、夜の散歩と行きますか」

レイは開けた窓から外へ飛び降りる。普通ならそれだけでもかなりの勇気がある行為な上、それなりのトレーニングが必要となる。が、レイにはそんな常識は通用しない。

レイは地面に降り立つと、そのまま校舎に向けて歩き出した。ただ自分と呼ぶ何かがあるその場所へ行く為に。本当なら日僕後の外出は認められないが、彼の前には校則などあつて無い様なモノなのだ。

「はぁ……良い夜だ。この優しい闇が気持ちいいな。なぁ、そう思うだろ？ リト」

レイは寝ていて答える筈のない理人に問いかける。

「この心地よさなら、お前も安らかに眠れるよな」

夜空を見上げるレイ。眼は鋭いままだが、その表情はとても優しいものだ。自分の内に眠るもう一人の自分、理人。半身とも言える彼への優しさは、まさしく愛情そのものだ。

夜のアカデミアを歩き、正面の入口の真上にある屋上エリアまでレイは来ていた。そこから見える光景はまさしく気持ちのいいものだった。大きく広がる満天の星空と満月。そして、月光を反射して煌く夜の海。それはまるで理人が使う『ジェムナイト』の宝石のようだ。

「ん？ あれは……」

ふとレイが視線を落とすと、見覚えのある赤い制服を着た少年二人が校舎に向かって走ってくるのが見えた。

「確か、HERO使いのバカとバカの腰巾着だったな」

人の名前を憶えないのはレイの悪い癖だ。だが、それは二人を対等の相手だと認めていないと言っただけの事だが。

「こんな時間に何の用だ？」

レイは首を捻りつつも、屋上から飛び降りる。所々の出っ張りを足場に、まるで岩跳びの様に跳び降りていく。

無事に入り口前に降り立ったレイは、十代と受験番号119番が入っていった入口の奥を暫くの間、じっと見つめる。そして――

「……面白そうだなあ。ちょっとつけてみるか」

口角を釣り上げて、十代の後を追う様に歩き出す。暫く歩いてい
ると直ぐに十代に追いつき、バレない様に隠れながら尾行する。

「アニキ！ 明日香さんが相手にしちゃダメだって！」

「なあに言っただ。デュエルだぞ？ 挑戦されたら受けるのが男
だろ」

「で、でも……」

どうやら十代は所謂不良などに分類されるロクでもない奴に絡ま
れ、助けてくれたであろう恩人の忠告を受けたにも拘らず、呼び出
されてこれからデュエルを行うらしい。

そのままレイが十代の後を追っていると、オベリスク・ブルーの
最新式デュエル・リングのデュエルアリーナに入っていた。

（ふん、HERO使いのバカはなかなか度胸があるな。好きなタ
イプの人間だな）

レイは十代の態度と信条に、半ば化の好印象を抱いたようだ。が、
その視線は十代の横にいる小学生の様に背の低いオシリス・レッド
の生徒に向けられ――

（それに比べて……アイツはただのポンコツ決闘者^{デュエリスト}か。嫌いなタイ
プだぜ）

ウンザリした様な眼でレイは小さい少年を見る。噂と見た目のみ
で相手を判断し、そして特に努力もせずに勝てないと決めつけ、挑
む勇気もない真正銘の雑魚がレイは最も嫌うのだ。

だがそれでも彼らの後を追うレイ。そこでは、オベリスク・ブル

ーの生徒と十代がデュエルを始めようとしていた。

「見せて貰うぜ？ クロノス教諭を倒したのがまぐれか実力か」

「ああ、オレも知りたかった所さ。デュエル・アカデミアのエリートって奴らが、どれぐらいの実力かさ」

「ははは！ いいか、互いのベストカードを掛けたアンティルルだ！」

「ああ。何でも来やがれ！」

オベリスク・ブルーの生徒——まんじゅめじゅん万丈目準と十代がデュエルディスクを起動させる。

『デュエル！』

万丈目準 LP4000 VS 遊城十代 LP4000

「まず俺のターン！ ドロー！」

万丈目は手札からモンスターカードをデュエルディスクに置く。

「リボーン・ゾンビを、守備表示で召喚！」

——オオオ……。

肉の腐りかけたゾンビが膝について防御姿勢で現れる。

『リボーン・ゾンビ 4/闇属性/アンデット族/攻1000/守1600 効果：自分の手札が0枚の場合、フィールド上に攻

撃表示で存在するこのカードは戦闘では破壊されない』

「カードを一枚伏せて、ターンエンドだ!」

レイは物陰からデュエルの風景を眺める。だがその眼は鋭く細められている。

「オベリスク・ブルーとオシリス・レッド。この頭脳の差が既に勝敗を決めているんだよ」

「デュエルは頭ん中でやるもんじゃない。アイツ心でぶつかるもんだぜ!」

万丈目の台詞に十代は熱く反論する。

「オレのターン、ドロー」

十代はデッキからカードをドローして手札を確認し、何やらぶつぶつと呟く。

（なんだ？ 何を言ってるんだアイツ）

「貴方、何してるの？」

（っ!）

突然後ろから話しかけられたレイは、思わず拳を振り上げそうになったがその声が女性であり、敵意が無いと即座に理解して押しとどめて振り返る。

そこには、金髪の美人なオベリスク・ブルーの女生徒が立ってい

た。

「別に何も、ただデュエルを見てただけさ」

「デュエル？ …… ああ、やっぱり」

女生徒は、レイの向こう側に見える風景を見て納得する。レイは首を傾げ、疑惑の目を彼女に向ける。

「彼が寮を出ていくのが見えたから、もしかしたらと思つて後をつけてきたの」

「魔法カード、融合発動！」
マジック

レイが彼女から事情を聴いている間に、十代が『E・HERO フェザーマン』『E・HERO バーストレディ』を手札融合させ、
『E・HERO フレイム・ウイングマン』融合召喚する。

『E・HERO フレイム・ウイングマン 6/風属性/戦士族
/攻2100/守1200 融合「E・HERO フェザーマン」
+「E・HERO バーストレディ」 効果：このカードが戦闘によつてモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。』

「マイ、フェイバリットカードだぜ」

だが、この状況では実に不用意な行為だった。

「さつそく掛かったな。お前の入試デュエルは既に念密に分析済みだ。デュエルは頭脳だ！ 罠カード、ヘル・ポリマー発動！」
トラップ

万丈目の場のリバーズカードがオープンになり、『ヘル・ポリマー』が発動する。

『ヘル・ポリマー 通常罠／相手が融合モンスターを融合召喚した時に発動する事ができる。自分フィールド上のモンスター1体をリリースする事で、その融合モンスター1体のコントロールを得る』

「ヘル・ポリマーって……？」

「デュエリスト決闘者にとって、基本的な知識よ」

女生徒が物陰から出ていき、十代の腰巾着の下へと歩いていく。

「明日香さん」

「相手が融合モンスターを融合召喚した時、自分の場のモンスター1体をリリースする事で、そのモンスターのコントロールを得る事が出来る」

「え？ それってどういう事？」

明日香と呼ばれた女生徒の説明にも全く理解できていない腰巾着

「要するに、ああいう事さ」

明日香の後ろから現れたレイが十代へ注意を向けるのを促す。注意を促された腰巾着はデュエルへ注意を向ける。

「リボーン・ゾンビをリリースし、フレイム・ウィングマンのコントロールを得る！」

『リボーン・ゾンビ』が消えていき、融合召喚された『E・HERO フレイム・ウイングマン』が爆発と共に万丈目のフィールドに黒いオーラを纏って現れる。

「モンスターが取られちゃった!？」

「クロノス教諭での戦いのトドメが融合モンスターだと知って、その罠を張っていたのさ。そんな事も知らずに、まんまと罠に入り込んでくるとはな。所詮オシリス・レッドだ」

万丈目は思った通りの展開に優越感を丸出しにして浸り、十代はまだ残されている通常召喚権を使って何を場に出すか考える。

その間に、レイは今に起きた出来事に対する予測としての分析を述べる。

「リボーン・ゾンビは手札ゼロの状態プラス攻撃表示で初めて、戦闘では破壊されない効果を発揮するカード。序盤で出すカードじゃない」

レイは無情なほど冷静に現状までの分析を説明し始める。

「と、いう事は、本命は伏せ^{リバース}カード。HERO使いバカの行動に対するカウンターだという事ぐらいは容易に想像できる。そしてアイツは融合HEROを主体とする。まるで絵に描いたような基礎基本の応用だな。何の捻りもない」

やれやれと肩をすくめるレイ。

「オレは、E・HERO クレイマンを守備表示で召喚」

——ぬうおお！

十代の場に岩の様なHEROが現れる。

『E・HERO クレイマン 4 / 地属性 / 戦士族 / 攻800 / 守2000』

「ターン、エンドだ」

「カード、ドロー！」

万丈目がデッキからカードをドロし、手札からモンスターを召喚する。

「地獄戦士を召喚！」

『ヘルソルジャー
地獄戦士 4 / 闇属性 / 戦士族 / 攻1200 / 守1400』

「行け！ フレイム・ウィングマン！ フレイムシュート！」

『E・HERO フレイム・ウィングマン』が焰を纏って防御姿勢の『E・HERO クレイマン』を引き裂き、『E・HERO クレイマン』は砕け散る。

「フレイム・ウィングマンのモンスター効果はよく知っているだろ？」

「っ！」

『E・HERO フレイム・ウィングマン』の破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える効果が発動し、十代の目の前で『

E・HERO フレイム・ウィングマン』の竜の頭の様な右腕から炎が噴出し、十代を包み込む。

「ぐああああ！」

十代 LP 4000 - 800 = 3200

「これでお前を守るモンスターはいない！ 地獄戦士！ ヘルアタック！」

『ヘルソルジャー 地獄戦士』が両手に持っている両手剣で十代を切り裂く。

「ぐう………！」

十代 LP 3200 - 1200 = 2000

「融合モンスターを封じられて、もう打つ手なしだな！ スモールタウンではどうだったか知らないが、お前はデュエル・アカデミアでやっていけるレベルではない！」

万丈目が体感した痛みで蹲る十代を見て優越感を更にワザとらしく曝け出す。

「カードを一枚セットし、ターンエンド！ さあ、お前の番だ！」

「ふ……く……くう………！」

「悔し泣きかい？ 110番」

だが十代は俯いたまま肩を震わせているのを悔し泣きしているの

だと勘違いした万丈目が問うが、帰って来たのは笑い声だった。

「くふふ、あははは！ 感動だぜ」

「何！？」

「デュエル・アカデミアは楽しいな。お前みたいのがゴロゴロしてるんだ。楽しみだぜ」

「なんだと？」

「オレのターン、ドロー！ E・HERO スパークマンを召喚！」

——ウオオオオオ！！

放電しながら電撃のHEROが姿を現す。

『E・HERO スパークマン 4 / 光属性 / 戦士族 / 攻16
00 / 守1400』

「いけえスパークマン！ スパーク、フラアーツシュ！」

——でええええ！！

『E・HERO スパークマン』が全身の電撃を右手に集中して、
ヘルソルジャー『地獄戦士』に向かって解き放つ。その電撃を受けたヘルソルジャー『地獄戦士』
は感電して爆発する。

「ぐう……くつ！」

万丈目 LP4000 - 4000 = 3600

しかし爆発した煙の中から『ヘルソルジャー地獄戦士』の持っていた剣が飛び出し、十代を貫く。

「ぐあ！」

「モンスター効果発動だ！ 地獄戦士は破壊された時に自分が受けたダメージ分のダメージを相手にも与えるのだ！」

「くっ……」

十代 LP 2000 - 400 = 1600

「アニキ！」

腰巾着が取り乱す。

「貴方の兄さん、威勢はいいけどちょっと迂闊ね。モンスター効果を無視するなんて」

「十代君はホントのお兄さんじゃなくて、なんていうか……僕の心のアニキなんだ」

「……？」

明日香が腰巾着の説明に首を傾げる。

「要するに自分勝手に兄貴と呼んで慕ってるだけって事だろ」

「ああ、なるほど。子分ってやつね」

「もしくはパシリだな」

明日香の知識は若干偏っているが、一般知識としてはその程度だろう。だがレイは面白がっているようでニヤニヤと笑みを浮かべている。

「カードを一枚伏せて、ターンエンド」

「次の攻撃で俺の勝ちだ。カード、ドロー！ 行け！ フレイム・ウィングマン、スパークマンにフレイムシュートだ！」

万丈目はドローしたカードを見る事無く、『E・HERO フレイム・ウィングマン』に攻撃の指示を飛ばす。

「^{トラップ}罠カード、異次元トンネル―ミラーゲート―！」

「何！？」

万丈目がまさかの罠に驚愕する。

「ミラーゲート！？」

「モンスター同士の戦闘時に発動できる罠^{トラップ}。自分と相手のモンスターのコントロールを入れ替えて戦闘させる」

「なるほど。このためにダメージを負ってでも、モンスターを破壊したって事か」

『異次元トンネル・ミラーゲート』の効果で、万丈目の場にいる『E・HERO フレイム・ウィングマン』と攻撃を受けた『E・

HERO スパークマン』のコントロールが入れ替わる。

「スアークリングブレイカー！」

——ウアアアアア！

——グオオオオオ！？

『E・HERO フレイム・ウィングマン』から発せられた電撃で『E・HERO スパークマン』が戦闘破壊される。

「ぐあああ！？」

万丈目 LP 3600 - 5000 = 3100

「更に！ フレイム・ウィングマンのモンスター効果で、破壊したモンスターの攻撃力分ダメージを相手に与える！」

『E・HERO フレイム・ウィングマン』の効果が電撃となつて万丈目のライフポイントから1600ポイントを奪う。

「うあああああ！？」

万丈目 LP 3100 - 1600 = 1500

「ふうん。やるじゃない」

「アニキ格好いい！」

腰巾着の声援を受けた十代は、万丈目を見つめながら背後のレイ

たちに向かってVサインを向ける。

「ふふ、お調子もん」

「ははは、なかなかの戦術だぜ」

明日香は若干苦笑いで、レイは微笑を浮かべながら呟く。

「この、調子に乗るな。オシリス・レッドのドロップアウトめ！」

万丈目はバトルフェイズからメインフェイズ2に移って手札から魔法カードを発動させる。

「手札から魔法カード、ヘル・ブラストを発動！」

万丈目と十代の間で風の渦が巻き起こる。

「自分がコントロールするモンスターが破壊されたターンに、フィールド上のモンスター一体を破壊。その攻撃力の半分のダメージを与える」

風の渦は『E・HERO フレイム・ウィングマン』を包み込んで破壊する。そしてその攻撃力の半分、1050ポイントのダメージを受ける。

「フレイム・ウィングマン……」

十代 LP1600-1050=550

「更に畏カード、リビングデットの呼び声発動！」

伏せられていたリバースカードがオープンされる。

「自分の墓地のモンスター一体を攻撃表示で特殊召喚する。地獄戦士を特殊召喚！」

『リビングデットの呼び声』の効果で『ヘルソルジャー地獄戦士』が蘇る。

「そして地獄戦士をリリースし、地獄將軍・メフィストを召喚！」

『ヘルジエネラル地獄將軍・メフィスト 5 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1800 / 守1700 効果：このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手に戦闘ダメージを与える。相手に戦闘ダメージを与えた時、相手の手札からカードを1枚ランダムに捨てる』

「どう転んでも、俺の勝ちが決まったようだな。アンティルールによつて、お前のベストカードを貰うぜ」

「ふつ。それはどうか」

「なに？」

一瞬万丈目も動揺するも、直ぐに冷静さを取り戻す。

「フツ。デュエルは99%の知性で勝敗は決する。運はたった1%に過ぎない」

だがその運命のドローを出来るのが、真の決闘者デュエリストなのだ。そして遊城十代はその決闘者デュエリストに近い所に居る。

「その1%にオレは賭ける。オレの引きは奇跡を起こす。オレのターン、ドロー！」

十代は勢いよくカードをドロ。そしてそのカードを見て――

「まずいな、見回りが来たぜ」

足音が聞こえたのか、レイが部屋の出口の方を睨みつけて言う。

「まずいわ。アンティールは校則で禁止されてるし、時間外に施設を使ってるし、校則違反で退学にされるわよ！」

事の重大さにいち早く気付いた明日香が警告する。

「え！？ そんな校則あるの！？」

おそらく生徒手帳を呼んでいないのだろう十代がびっくりする。

「万丈目さん！ やばいつすよ！」

「今夜はこれまでだ。俺の勝ちは預けておいてやる」

「まだ勝負は終わっちゃいないぜ！」

「もう十分さ。お前の实力は見せてもらった。入学試験はまぐれだったようだな」

「ふざけんな！ 逃げるのかよ！」

十代が叫ぶが、万丈目たちは通路の奥へ消えていく。

「アニキ、見つかったちゃうよ!」

「こつちよ!」

腰巾着と明日香が声を掛けるが、十代は動かない。

「うう……嫌だ! オレは此処から動かない!」

「子供か」

十代の駄々っ子に、思わずレイはツツコミを入れる。だがこのままだと本当にまずいので、レイは十代を無理やり抱き抱える。

「お、おい!」

「入学したてで問題起こすなよ。行くぞ!」

「こつちよ」

レイは十代を抱えたまま、明日香の案内に従ってデュエルアリーナを後にする。その数十秒後、巡回しているガードマンがアリーナに入ってきた。まさにギリギリのタイミングだった。

途中で十代を降ろしたレイたちは、校舎の外で一息ついていた。

「ふう……ここまでくれば大丈夫か?」

「ええ。まったく、世話の焼ける人ね」

明日香が未だに拗ねている十代を見ながら言う。

「ちえ、余計な事を」

「どう？ オベリスク・ブルーの洗礼を受けた感想は」

「まあまあかな。もう少しやると思ったけどね」

「そうかしら？」

明日香が十代に詰より、問う。

「邪魔が入らなかったら、アンティールで大事なカードを失う所じゃなかった？」

「いや、今のデュエル。オレの勝ちだぜ」

そう言っで見せてくるのは、さっきドロしたまま手に持っている魔法カード『死者蘇生』。『死者蘇生』で『E・HERO フレイム・ウィングマン』を墓地から特殊召喚して止めを刺すつもりだったらしい。そうすれば戦闘ダメージと効果ダメージの合計2100が万丈目のライフをゼロにしていただろう。まさしく運命のドロいだ。

「さて、オレもそろそろ帰るか」

レイが寮に向かって歩き出そうとした所で、十代がレイに声をかける。

「なあ、お前の名前なんて言うんだ？」

「ん？」

レイは立ち止まって振り返り、ニヤリと笑って名乗る。

「オレはレイ。お前らは？」

「俺は遊城十代」

「私は天上院明日香^{てんじょういん}」

「僕は丸藤翔^{まるふじ しょう}です」

「よろしくな。といっても、また会えるかどうかはわからないけどな」

「は？ どういう事だよ？」

「ま、運が良ければまた会えるさ。じゃあな！」

レイは十代たちに挨拶すると、そのままラー・イエローの寮に向かって歩き出した。

（此処なら、きっと大丈夫だぜ。リト！ もう、あの頃のような地獄を味わう事は無い）

理人にも、十代たちにも内緒のこの邂逅に、レイはただ一人心中で笑っていた。

TURN・02 フレーム・ウィングマン（後書き）

次回予告

翔

「アニキアニキアニキ！」

十代

「おつせえぞ、翔。どこ行ってたんだよ。体育の授業とつくに始まつてるぞ！」

翔

「ごめんごめん。それよりさ、これ見てよ！明日香さんからラブレター貰っちゃった！」

十代

「ふうん……」

翔

「もう、もっと驚いてよ」

理人

「はあ……」

十代

「ん？ こっちもこっちでどうした？」

理人

「なんか呼び出されちゃって、憂鬱なんだ」

十代

「ああ……。よくわかんねえけど、頑張れよ」

翔

「もう二人とも無視して！ いいもん、僕一人で行くよ。いざ、女子寮へ！」

次回 TURN - 03 エトワール・サイバー

十代

「おい！ 翔、どこ行った！？」

レイ

「腰巾着……。お前……」

翔

「誤解だよー！」

TURN・03 エトワール・サイバー

アカデミアの入学式が終わって翌日の初授業。

「セニョール天上院。今までのおさらいとして、デュエルモンスターズのカードの種類を答えてほしいノ」

「はい」

クロノス教諭に指名された明日香が席から立ち上がり、問われた事に答える。

「デュエルモンスターズのカードには、通常モンスターカード、融合モンスターカード、儀式モンスターカード、効果モンスターカード。そして魔法カード^{マジック}、罠カード^{トラップ}があります。更に罠カード^{トラップ}には、通常罠、永続罠、カウンター罠。魔法カード^{マジック}は通常魔法、永続魔法、速攻魔法、装備魔法、儀式魔法最後にフィールド魔法と分けられます」

「んー。パーフェクト。オベリスク・ブルーのセニョールにはちょっと優しすぎた質問でしターネ」

「基本ですから」

答え終った明日香はそのまま席に座る。

「ではセニョール九条」

「あ、はい」

今度は理人が立ち上がり、クロノスの質問を待つ。

「効果モンスターには現在、何種類の効果に分けられるでしょう？」

理人は一度だけ深呼吸をして、はっきりと答える。勿論、この時も帽子は深く被ったままである。

「反転した時に効果が発動するリバース効果。表側表示である限り効果が発揮され続ける永続効果。発動を宣言して使う事ができる起動効果。指定されたタイミングで発動する誘発効果。そして最後に使用タイミングは限定されているものの相手のターンでも任意で発動させる事が可能な特別な効果、誘発即自効果。効果モンスターの効果はこれらに分類されます」

「では続いて質問するノーネ。効果モンスターにはどんなジャンルがあるでシヨー？」

「特殊召喚できず、召喚またはリバースしたターンのエンドフェイズ時に手札に戻るスピリット。一ターンに一度、特定のモンスターに装備させたり、特殊召喚ができるユニオン。墓地またはフィールド上では通常モンスターとして扱い、再度召喚する事で強力な効果モンスターとなるデュアル。そして、ペガサス会長だけが使用するカードとしてトウーンがあります」

「全部正解なノーネ。座つてよろしい」

クロノスの許可で漸く席に着いた理人に、拍手が注がれる。

「それではあ……セニョール丸藤」

「は、はい！」

緊張した面持ちで立ち上がる翔。

「フィールド魔法の説明をしてほしいノーネ」

「あ、えつと……その、あの……」

緊張しているのか、翔はうまく答えられずシドロモドロ。そのまま答えられずに狼狽していると席の後方から、「そんな幼稚園児でも知ってるぜえ！」からかいの言葉が浴びせられて笑い声が巻き起こる。

十代が落ち着かせようと声をかけるも、翔は恥ずかしさで真っ赤になって一言たりとも答えられなくなってしまった。

「よろしい。引っ込みなさいーノ」

クロノスの合図で翔は席に座る。

「基本中の基本も答えられナイイとは……。さあすがオシリス・レツド、驚きでスーノ」

クロノスの翔をバカにした発言に、教室は再び笑い声に包まれた。そしてその笑い声の中、ラー・イエローの三沢と理人は翔を同情にも似た視線を送る。

（全く、この程度の知識ぐらい持ってねえアイツは決闘者失格だデュエリストな）

（そこまで言わなくても。ただ緊張して喋れなくなってるだけかも……）

理人はイライラしているレイを宥めようとするが……。

（ハッ。俺がああいう、他人に縋る事しかせずに努力もしない奴が大っ嫌いなんだよ）

グサア！と効果音が聞こえてきそうなくらい、理人の胸にレイの言葉が突き刺さる。

（……む、胸が痛い）

（あ。い、いや、俺はリトの事を言ったんじゃない……ええっと、だからあ……）

思いがけず理人が精神的にダメージを受ける言葉を言ってしまい、レイは慌てて理人を励まそうと言葉を投げかける。

「お、おい理人。大丈夫か？」

理人の異変に気が付いた隣に座る三沢が小声で話し掛ける。理人は精神的にレイの言葉が突き刺さった胸を抑えながら、理人は三沢に答える。

「だ、大丈夫。ちょっと突き刺さる言葉を耳にした気がただけだから」

「突き刺さる？」

三沢は理解しきれていないようだが、今は授業中。体調不良ではないという事がわかったのでそれ以上は尋ねなかった。

「でもさ先生。知識と実力は関係ないですよね？」

十代の一言にビクリとクロノスが震える。

「だってオレもオシリス・レッドの一人だけど、先生にデュエルで勝っちゃったし♪」

「むむむっ……！！」

クロノス先生はハンカチを食いちぎらんばかりに口で噛んで引っぱり、あからさまに悔しそうな様を表現する。その様子が更に生徒たちのツボにハマリ、翔の時以上の笑いが巻き起こる。

そして十代はその笑い声に答えるかのように周りの生徒たちにピースサインを送って調子に乗っている。その様子を理人よりも奥の席から興味深げに、そして面白げに見ている明日香が居た。

そんなこんなでクロノスの授業はぐだぐだで終わり、今は既に次の授業の錬金術の授業が始まっていた。

錬金術の講師はオシリス・レッド寮長でもある大徳寺。いつも飄々とし、語尾に「〜にゃ」と付けて喋り、いつでも愛猫「ファラオ」を連れている。

「ええ錬金術とは、文字通り金属でない物から金属、特に金を作り出す事です。広い意味では、一般の物質を完全な物質に変化、編成しようとする技術の事なんだにゃ」

（俺、アイツ、授業、キライ）

（な、なんでカタコトなの？）

心の奥に引ッ込んで大徳寺の講義を聞こうともしないレイが暇なのか唐突に呟き、理人は思わず苦笑い。

「元々は古代エジプトからアラビア、西洋に伝わった――」

大徳寺が話すのをやめ、ある生徒の方向の一点を見つめる。

「丸藤く〜ん」

「は、はいっ！」

再び名前を呼ばれた翔が驚いたように立ち上がる。

「ファラオを捕まえてくれませんか？」

「え、ファラオ……？」

「私の猫ですよ」

大徳寺がそう言った途端、翔の足元で「にゃあ〜」と猫の鳴き声がし、翔が視線を落として自分の足元を見ればそこには翔の足に頭を擦り付けるデブ猫がいた。

（なんで猫なんか連れて来てんだよ）

（可愛いね♪）

（……そうかあ？）

理人の中でレイが怪訝な顔をして理人の視界を通じてファラオを見るが、やっぱり不細工なデブ猫にしか見えず、レイにはお世辞にも可愛いとは言えないと思った。

（俺にはとても可愛いとは……）

（可愛いよ？）

（……いや、だから）

（可愛いよ？）

（……ああ、そうだな）

このままだといつまでも続くと判断したレイは、適当に肯定する事でこの話題を終わらせようと決めた。相変わらず理人のある意味の美的センスは何処かズレてる。そう改めて思ったレイであったが、それを理人が知る事は絶対に来ないだろう。

大徳寺の授業が終わったお昼休み。理人を含めた十代、翔の三人は揃って昼食を取ろうと購買へ向かっていた。

「しかし、理人は頭良いんだな」

「そんな事ないよ。あれは簡単に誰でも覚えられる事だし、覚えていても知識としてぐらいしか役に立たないし」

確かに実践では、相手のモンスター効果は自分から確認する事はできない。相手に教えてくれと言えば、インタスト・イリュージョン I2社の定めた公式ルール上では教えないけれども、基本的に相手から勝手に教えてくれるのであまり意味はない。以上の事から、まあ知っていれば理解が楽になる程度の意味しかない。

「でも、ラー・イエローに入れるだけはあるって感じだったね。あんな難しい事を知ってるん何て」

感心している翔に、理人の理人は無情な一言を投げつける。

「でもこれってデュエルモンスターズをやる人間なら知ってて当たり前の知識だよ？ 効果モンスターの効果処理は、デュエルで一番重要なんだから」

「確かに。アレが出来なかったら楽しいデュエルなんてできねえもんな」

「……………」

理人の台詞に十代がうんうんと頷いて同意すると、この中で最もデュエルタクティクスの低い翔がずんとした暗い雰囲気を感じてしまった。

それに気づいた二人が翔を宥めようと四苦八苦。だがそんな最中、三人の空気をぶち壊すかの如く校内放送が掛けられた。

——ラー・イエローの九条理人君。お電話が来ております。至急校

長室まで来てください。

女性の声で掛けられる放送は、二、三度繰り返されてからチャイムと共に終わる。

「理人、校長室に呼び出されたな」

十代がニヤニヤとした顔で理人の背中を叩く。

「んじゃ、オレらは先行ってるぜ！」

「あ、待ってよアニキ！」

十代はそう言って購買まで走っていき、翔もその後を追いかける。後に残された理人は、溜息を一つ付きながらも校長室に向けて一歩踏み出す。

（電話……一体誰だろう？）

（俺達に電話なんてくれる奴はほんの数人だけだよ。アイツら誰も彼も自分から電話はしようとしねえ奴らだし……）

理人の中のレイと揃って首を傾げる。今の理人やレイの身内に、わざわざ学校へ連絡してまで連絡を取り合おうという人間はいないからだ。それに“彼ら”ならば個人的に持っている携帯端末に連絡を入れてくるはずだからである。

（あ、そういえば）

（ん？）

（レイはいつの間に十代達と知り合ったの？）

理人の質問にレイは「あ……」と空を見上げる様に呟いた。

実はさつき、十代達と歩いている時に昨日不思議な雰囲気のレイという名の生徒と出会ったという話題が出ていたのだ。その話題の人物が紅い髪で紅い瞳だったという特徴から、理人は間違いなくもう一人の自分、レイであると判断したのだ。

（昨日お前が寝てから外をちょっと散歩しててな。んで、十代を見かけて面白そうだったから……つい）

（手を出しちゃった？）

（出しちゃいないが、まあそうなるかな）

（帽子まで取って……）

（いや、悪かったって……マジで）

若干落ち込み気味の理人を宥めるレイ。しかし、その足取りは段々と遅くなり、ついには立ち止まってしまった。

（そ、そんなにショック受けなくてもいいだろ――）

「校長室って……どっちだっけ？」

（――ってオイ。知らずに進んでたのかよ）

キョロキョロと辺りを見渡して首を傾げる理人に、思わずレイが

ツツコミを入れる。

（てか生徒手帳見るよ。アレに案内図があるはずだろ？）

「あ、そっか。そうだよね」

理人はポケットから生徒手帳を取出し、校内案内図のページを開いて調べる。

開いたページには、校内の案内図と共に今の自分の現在位置まで表示されるので、余程の方向オンチでない限り迷う事は無い。ただし、理人の様に案内図の存在に気づかないうっかり者は除外される。漸く校長室へ向かって移動し始めた理人の内側で、レイは溜息を吐いていたのだった。

校内を彷徨う事、約十分。理人は漸く校長室の前までたどり着いた。

（な、永かったぜ……）

理人の内側にいるレイが深々と、疲れた言わんばかりの溜息を漏らした。

此処まで来るのに本当に長かった。理人はただでさえ、帽子と使用するカードの事で目立っている。故にオベリスク・ブルーの女子生徒に見つかり、質問攻めにされたのだ。それらを全て上手く誤魔化しながら校長室に辿り着くまで、実に長かった。

（全くよお。やれ帽子を取って顔を見せてくれたの、やれカードを見せてくれたの、やれ何処から来たのだ、どうして帽子を被っているのかだの。言う訳ねえし見せる訳ねえだろ、バゝカバゝカ！）

（レイ、此処で言っても意味ないよ？）

イライラとストレスが溜り過ぎて若干幼児退行しているレイに、苦笑いしながらツツコミを入れる理人。

「とりあえず入るよ？」

（……おう）

レイに若干元気がないが、とりあえず目の前の目的を済ませる事を優先する理人であった。

気を取り直して、理人は扉の隣に備え付けられているインターフオンに人差し指を添え、グツと押し込む。すると、ピンポンと至極当たり前な音が鳴り、中から「はいりたまえ」と合図があった為、扉の内側へ進む。

「失礼します」

「おお、漸く来たかね」

校長室には、大柄で横に太い校長鮫島が校長席に座り、その隣に実技担当最高責任者であるクロノスが立っていた。

「ちょっと時間が掛かり過ぎなノ〜ネ。次からはもう少し早く来るように」

「すみません。道に迷ってしまって」

「まあまあ、クロノス先生。九条君はまだ学校という環境に慣れて

いないのですから、大目に見てやってください」

申し訳なさそうに頭を下げる理人を、鮫島校長が庇う。

「校長がそう言うなら、仕方ないノーネ」

鮫島校長に言われ、あっさりと引き下がるクロノス。元々そこま
で糾弾するつもりもなかったらしい。ただ、少々時間を掛かり過ぎ
だと注意したかったのだろう。理人の事情はこのデュエル・アカデ
ミアの教師ならば誰でも知っているのだから。

「さて、本題と行きましようか。放送でも言ったように、君に連絡
を取りたいという人物から電話が来ている」

「僕に……ですか？ 相手は……」

「それは見て貰った方が早いでしょう」

鮫島校長は、校長室の設備の一つである壁にはめ込んだ薄型の大
きなテレビに視線を向ける。それに釣られて理人も見れば、そこ
には顔半分を覆うほどの長さの銀髪に紅い礼服に身を包んだ誰もが
よく知る人物であり、理人にとって恩人の一人。

「ペガサスさん！」

デュエルモンスターズの生みの親であり、インダスト・イリユー
ジョン社の会長。ペガサス・J・クロフォード本人だった。

「ハロー、理人ボーイ。元気でしたか？」

「はい！ ペガサスさんもお変わりない様で何よりです！」

理人はテレビの前まで駆け寄ると、今までにないほどハキハキと笑顔で答えた。

「ふふふ。最後に会った二週間前よりも、ずっと良い笑顔になりましたネ」

「そ、そうですね？」

恥ずかしそうに頬を掻く理人。その様子にペガサスは微笑む。

「今日はそんな理人ボーイに伝える事があって連絡したのデース」

「伝える事？」

理人は首を傾げてペガサスの次の言葉を待つ。

「次の月一テストでは上位コースに昇格できる制度がある。そうです、ね、ミスター 鮫島」

ペガサスがそう尋ねると、鮫島校長は「はい」と頷く。

「そこで、私と海馬ボーイは話し合い、貴方にはブルーへ昇格してもらったのデース」

「え？」

「因みに、これは海馬ボーイの伝言なのですが……」

そうやってペガサスは画面の向こうで何やらごそごそ。そして取り出したのは――

「ボイスレコーダー？」

「そうデース。この中には海馬ボーイの伝言が記録されていマース」

そう言うとペガサスはボイスレコーダーのスイッチを押し、録音された海馬コーポレーション社長の海馬瀬人のメッセージが再生され始めた。

『フウン。理人にレイ、お前たちの後見人はこの俺、海馬瀬人だ。よってお前達にはオシリス・レッドやラー・イエローなどという弱小コースに留まるなど許さん。そんな無様な真似が、俺の身内に許されると思うな。いいな、これは決定事項だ』

「――っと、いう訳なのデース」

再生し終わったボイスレコーダーをしまっペガサス。瀬人からの伝言を聞き終えた理人は内から湧き上がってくるある感情を感じていた。もっとも瀬人をライバル視しているもう一人も自分自身の怒りとも言える感情を。

「海馬ボーイの言葉で理解できましたネ？ 理人ボーイは次の試験で合格し、オベリスク・ブルーへ昇格しなければなりませーン」

ニコニコとしながら言っていたペガサスの表情が一気に真剣なモノに変わる。

「これは、貴方が貴方自身をコントロールできるようになる為の、

一つの試練なのです。わかりますね、レイ」

ペガサスの言葉にコクリと頷く理人。しかし、そのまま俯いて動かない。

「……いいぜ」

落ち込んでいるのかと思った時、彼の人格が変わった。
理人からレイに変わり――

「その試練、受けてやろうじゃなか！」

顔を上げて吼えた。

「瀬人にあそこまで言われて嫌だと言えるかよ！ あの青眼バカが！ いつかぶっ飛ばしてやる！」

それが本音か。そう心の中でツツコミを入れたレイ以外の一同であつた。

その夜。理人は自分の部屋でデッキの調整を行っていた。

机の上に一枚ずつ広げられた色とりどりのカード達。ペガサスが理人の為に、世界中の宝石の中からパワーストーンと呼ばれる神秘の力を宿した奇跡の宝石の成分をカードに使って作り出した。この

世界でたった数枚しか存在しない激レアカード『ジエムナイト』シリーズ。そして、その宝石達をより鮮やかに輝かせる為の専用サポートカード。

その一枚一枚が理人の力を抑える力を秘め、極力暴走しない状態で今の理人を安定させている枷でもある。

「……………」

理人はその四十枚のカードを見つめながら、一枚一枚重ねていく。これから幾度も戦っていくであろうこのデッキの、今の最適な形で組んでいく。

「……………出来た」

最後の一枚を重ねて、今の理人に作れる最良のデッキを完成させる。

（出来たか？ お前のデッキ）

「うん。これが、今の僕に作れる最良のデッキ」

（ま、最高のデッキなんてお前に作れるとは思っちゃいなかったけどさ、上出来じゃね？）

「ありがとう、レイ」

そう礼を言った直後。同じく机の上に置いておいた生徒手帳の電子音が鳴り響く。

手に取って通話を応答にすると、画面に出たのは十代だった。

『よ、起きてるか?』

(見りゃ分かんたる)

「う、うん。まだ起きてるけど……どうかした?」

レイの冷たいツッコミに若干苦笑いしながら十代に電話の内容を促す。

『いや、実はさ……女子寮行きたいんだけど、道わかんなくてさ』

「……………」

(……………)

思わず無言になるレイと理人。ふと時計を見れば、九時を過ぎた頃。ちょうどお風呂の時間帯である。そして十代が行きたいというのはこのアカデミアで唯一あるオベリスク・ブルーの女子寮。これらから導き出される答えは――

「十代君……その、覗きは……良くないと、僕は思うんだ」

(お前がそこら辺のスケベ野郎と同じだとは思わなかったぜ)

となるのが当然である。

『いやいやいや、ちょっと待ってって! 覗きに行くんじゃないで翔を助けに行く為なんだって!』

「翔君を?」

（どういつだった？）

理人とレイが首を傾げていると、十代は理由を話し始めた。

『さつき——丸藤翔は預かった。返して欲しくば女子寮まで来い。
——っていう音声メールが来たんだよ。実際翔は少し前から姿を見てねえし』

つまり、何故かはわからないが翔が女子寮にいて、そしてなぜか捉えられている。そして返して欲しかった女子寮まで来いというメールが十代の下に来たが、女子寮までの道がわからない。だからとりあえず知っていそうな理人に声をかけたという事だ。

「わかった。道案内するよ。僕も気になるし」

『お！ サンキュー理人、助かるぜ。んじゃ、とりあえず校舎の前で待ち合わせな』

「わかった。それじゃ、後で」

理人はそのまま通話を終えると、脱いでいた制服を着て出来上がったデッキを腰に巻いたベルトに付いているデッキケースの中に納める。

（行くのか？）

「もちろん」

（ま、いいけどな。どうせ散歩行く予定だったし）

理人は部屋の電気を消し、レイに変わって窓から飛び降りる。

その後、一足早く校舎の前で待ち合わせていた十代と合流し、足早にデュエル・アカデミア唯一の女子寮に向かって移動。女生徒は全て無条件でオベリスク・ブルーに入るようになっていて、この孤島で最も大きな湖にせり出す形で女子寮は建築されている。唯一の女子寮である事と、覗きの防止、そして防犯の役目があるが、反対岸への移動手段はボートと徒歩のみと意外と不便。

そして十代と理人は今、ボートで直接女子寮の裏に向かっていて。勿論ボートもオールでの手漕ぎだ。因みに漕いでいるのは十代である。

「アニキ」

漸く女子寮の裏の船着き場に辿り着いたと思ったら、翔が二人の女子に拘束され、更に明日香までもがそこに立っていた。

「翔、これはどういう事なんだ？」

「捕まって聞いたけど……見た通り拘束されてるね」

（手も足も出せない、ってな♪ あっはははは！）

（レイ、黙って）

ケラケラと翔の有様を見て笑い転げるレイに、理人は若干冷たく言い放つ。

「それが、話せば長くなるよ……長くないよ……」

「こいつがね、女子寮のお風呂を覗いたのよ」

「覗いてないって！ もぉ……！」

いがみ合う翔と女生徒。

「それがバレたら、きっと退学ですわ」

「そこで、貴方とデュエルして処遇を決めようと思ってたんだけど……」

スツと目を細めて明日香が十代を見るが、その視線は理人に向かう。

「試験デュエルを見た時から、貴方のジェムナイトってカードに興味を惹かれてるのよね」

「……………」

理人は思わず腰のデッキケースに視線を落とす。

「だから、九条理人。私とデュエルしましょ。貴方が勝ったら、お風呂覗きの件は目に見てあげる」

「いいぜ、やってやれよ。理人」

「でも……………」

言い訳を並べてデュエルを拒否しようとしたその時、理人の脳裏に瀬人の言葉が蘇る。

——一度だけ言っておいてやる。デュエルをする事無く負けるなとど、そんな無様な真似が俺の身内に許されると思うな。

このアカデミアに入学した時から、デュエルから逃げる事は許されない。そもそも、今の自分を変えたいから此処に来たのだ。であれば、このデュエルも逃げる事は出来ない。否、逃げる意味など無い。

「わかった。そのデュエル、受けるよ」

「フツ。そうこなくちゃ、順子」

「はい」

順子と呼ばれた女生徒は翔の両手に巻いた縄を外し、理人に持ってきていたデュエルディスクを貸し渡す。

そして、三人ずつに分かれてボートに乗り、湖の中央まで漕ぎ進め、適度な距離を開けて向かい合う。

「へへ。理人のデュエルか。初めて見るぜ」

「そっか。アニキは試験に遅刻して見てなかったんだっけ」

「ああ。だからワクワクしてしょうがねえぜ」

と十代と翔が興奮しながらこいれから始まるデュエルに心を躍ら

せていた。

そんな二人の気持ちを知ってか知らずか、明日香と理人はボートの船首に立って左腕にデュエルディスクを装着。お互いにデッキをシャッフルしてデュエルディスクにセット。

『デュエル!』

明日香 LP4000 VS 理人 LP4000

「私の先行。ドロー!」

明日香が五枚の手札と共に先行ドローを決め、理人も五枚の手札を揃える。

「私は、エトワール・サイバーを召喚!」

明日香がデュエルディスクにカードを置き、明日香の場にリボンを巻いた女性の踊り子が現れる。

『エトワール・サイバー 4/地属性/戦士族/攻1200/守1600 効果:このカードは相手プレイヤーを直接攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が500ポイントアップする』

「そして、私はカードを二枚伏せて、ターンエンド」

『エトワール・サイバー』の後ろにカードが二枚出現し、明日香のターンは終了。

「僕のターン、ドロー」

理人はデッキからカードを引き、手札に加えて別のカードをデュ

エルディスクに置く。

「僕は、ジェムナイト・アレキサンドを召喚」

理人の前に、アレキサンドライトの宝石が現れ、そして碎けて輝石の騎士が現れる。

『ジェムナイト・アレキサンド 4 / 地属性 / 岩石族 / 攻180
0 / 守1200』

「よし。エトワール・サイバーよりも攻撃力はずっと上だ！」

翔が理人の召喚したモンスターに興奮する。

「これが、理人のモンスターか……。くうくカッコいい！」

同じく目をキラキラさせて成り行きを見守る十代。

「ジャムナイト・アレキサンドの効果発動。このカードをリリース」

『ジェムナイト・アレキサンド』は再び宝石に戻ると、ゆっくりと回り始め、月光の加減で三色に美しく輝く。

「ああ、せっかく出したモンスターをどうしてリリースなんか」

「アレキサンドはリリースする事で、デッキからジェムナイトを特殊召喚する事ができる」

「って事は？」

「より強力なモンスターが出てくるって事ね」

翔が首を傾げ、明日香が若干苦虫を噛み潰したように顔を歪める。

『ジェムナイト・アレキサンド 4 / 地属性 / 岩石族 / 攻18
00 / 守1200 効果：このカードをリリースして発動する。自分のデッキから「ジェムナイト」と名のついた通常モンスター一体を自分フィールド上に特殊召喚する』

「デッキから、ジェムナイト・サファイアを守備表示で特殊召喚！」

アレキサンドライトの輝きに青が強くなり、アレキサンドライトからサファイアに変化。そして宝石が砕け、中から新たな輝石の騎士が姿を現す。

『ジェムナイト・サファイア 4 / 地属性 / 水族 / 攻0 / 守2100』

「しゅ、守備力2100？ どうして攻撃力高いアレキサンドをリリースしてまでこんなモンスターを……」

翔は目をパチパチと瞬かせ、理人のプレイングミスをしたのかと思ってしまった。だが、これをいち早く理解した十代と明日香。

「いや、これが理人の狙いだ。アイツは必ず——」

「ジェムナイトは融合してから力を発揮する。試験で見た通りならこの後——」

『融合を使う』

二人が声を揃えたその時、理人は手札から一枚のカードをデュエルディスクに差し込む。

「手札から魔法カード、^{マジック}ジャムナイト・フュージョン発動！」

理人は更に手札からカードをデュエルディスクに置く。

「僕は場のサファイアと、手札のルマリンを融合！」

サファイアが宝石へと姿を変え、現れたもう一つの宝石イエロートルマリンと共に、理人の頭上で重なり合う。

「二つの輝石が重なりし時、勇敢なる騎士が目覚める。光り輝く道となれ！」

サファイアとイエロートルマリンが弾けて収束し、青く澄んだ宝石がとなってフィールドに舞い戻る。

「融合召喚！ 切り込め、ジェムナイト・アクアマリナ！」

舞い降りた宝石は砕け、大きな刃の付いた丸い盾を持ったアクアマリンの騎士が現れる。

『ジェムナイト・アクアマリナ 6 / 地属性 / 水族 / 攻1400 / 守2600 「ジェムナイト・サファイア」 + 「ジェムナイト」と名のついたモンスター 融合・効果：このカードは上記のカードを融合素材にした融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚する事ができる』

「ま、前と違うモンスター？ そんな、組み合わせは同じだったはず」

明日香が驚愕に目を見開きながら呟く。

「ジェムナイトは、宝石の組み合わせで様々な化学反応を起こし、様々な形に姿を変える変幻自在な宝石達。それがジェムナイト」

明日香の疑問に答えるように言い放たれた理人の台詞に――

「すつげえ！　まるでHEROみたいだぜ！」

興奮した十代がボートの上で立ち上がって叫ぶ。

「でも攻撃力1400だよ？　融合する前の方よりは攻撃力は高いけど……」

そんな翔の独り言を無視するかのように、バトルフェイズへと入る。

「バトル！　アクアマリナで、エトワール・サイバーに攻撃！　ジヤム・シールドスラッシュ！」

『ジェムナイト・アクアマリナ』が大きな刃の付いた盾を真っ直ぐ構えて、『エトワール・サイバー』に向かって走り出す。

「^{トラップ}罠カード、オープン！　ドゥーブル・パッセ、発動！」

『エトワール・サイバー』の後ろのカードがオープンされ、通常罠が発動する。

「ドゥーブル・パッセは、相手の攻撃をプレイヤーへの直接攻撃に^{ダイレクトアタック}変え、攻撃対象となったモンスターは相手に直接攻撃できる！」

「手札から速攻魔法、突進発動！」

「なっ!?!」

『ジェムナイト・アクアマリナ』の攻撃力が『突進』の効果で700アップし、2100になる。だが攻撃が止まる事はなく、チェイン処理により『ドゥーブル・パッセ』の効果により『エトワール・サイバー』を身体を捻って避け――

――ダアア!!

明日香をその大きな刃の付いた盾で切り裂く。

「ぐうう!!」

ソリッド・ヴィジョン
立体映像による体感システムで、明日香の身体に刃で斬り付けられたような鈍い痛みが走る。

明日香 LP4000 - 2100 = 1900

「そして、攻撃対象となったエトワール・サイバーは、僕に直接攻撃^{タック}ができる」
ダイレクトア

『エトワール・サイバー』が『ジェムナイト・アクアマリナ』と入れ替わる様に、今度は理人に向かって水上を滑って迫る。そして、自身の効果によって攻撃力が600ポイントアップする。

「エトワール・サイバーの攻撃時! リバー伏せカードオープン! 速攻魔法、突進!」

「しまっ！」

『エトワール・サイバー』 攻撃力1200+600+700=2500

——セヤアア——！

「グアッ……」

『エトワール・サイバー』の強烈なハイキックが理人の肩を直撃する。

理人 LP4000-2500=1500

「くっ、まさか同じ手で来るなんて思わなかった」

「甘いわ、エトワール・サイバーとドゥーブル・パッセのコンボの弱点。それは、攻撃力低さ。それを野放しにするとと思う？」

（なるほど、こりや理人の読みが甘かったな）

不敵な笑みと共に明日香の言い放った台詞にレイは面白そうに笑う。それを若干に思う理人だったが、直ぐに意識をデュエルに戻す。

「……バトルフェイズを終了するよ」

「まずいっす！ このままだと攻撃力の低いアクアマリナが次のターン破壊されちゃう！」

翔がそう叫んで『ジェムナイト・アクアマリナ』を見るが、肝心

の『ジェムナイト・アクアマリナ』の表示形式は攻撃表示から守備表示に変更されて、その大きな盾で身を守る様に身構っている。

「あ、あれ？ どうしてアクアマリナの表示形式が……。攻撃したモンスターは表示形式を変えられないはずじゃあ……」

「いや、表示形式の変更は任意での変更が出来るだけで、カード効果による表示形式の変更は可能だ。つまり……」

「アクアマリナのモンスター効果ね」

翔の疑問に、十代と明日香が交互に解説を交えて答え、続いて理人が解説し始める。

「そう。アクアマリナは、攻撃したバトルフェイズ終了時、守備表示になる。そしてカードを二枚伏せて、ターンエンド」

理人はライフを大きく削られながらも、強力な守備モンスターと伏せカードを残してターンを終了する。だが、これで理人の手札は0。

そして、このデュエルを見ていた一同からは溜息が出た。

「す、凄い。たった一ターンの攻防で二人ともライフが半分を切った」

「それじゃない。理人は守備力2600の大型モンスター。そして墓地に送られたら相手のカードを一枚手札に戻す効果まである。迂闊に破壊できないぜ」

「明日香さんが此処まで苦戦するなんて」

「でも明日香さんの有利に変わりありませんわ」

明日香のターンとなり、デッキからカードをドローする。

「ドロー」

引いたカードを見て、明日香は再び不敵な笑みを浮かべる。

「悪いけど、その子には退場してもらっわよ」

そう言っつて、手札から一枚のカードをデュエルディスクに差し込む。

「手札から、魔法カード、融合発動！」

明日香の手札とフィールドから、合わせて二体のモンスターを墓地に送る。

「手札のブレード・スケーターとエトワール・サイバーを融合！」

『ブレード・スケーター』と『エトワール・サイバー』が渦となつて交わり、渦の中から新たなモンスターとなつて現れる。

「サイバー・ブレイダーを召喚！」

『サイバー・ブレイダー 7/地属性/戦士族/攻2100/守800 「エトワール・サイバー」+「ブレード・スケーター」
効果：このモンスターの融合召喚は上記のカードでしか行えない。
相手のコントロールするモンスターが1体の場合、このカード

は戦闘によつては破壊されない。相手のコントロールするモンスターが2体のみの場合、このカードの攻撃力は倍になる。相手のコントロールするモンスターが3体のみの場合、このカードは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にする』

「そして手札から、装備魔法フュージョン・ウェポンを発動！ サイバー・ブレイダーに装備」

『サイバー・ブレイダー』の右腕が機械的な武器と融合し、変化する。

『サイバー・ブレイダー』 攻撃力2100+1500＝3600

「たった一ターンで攻撃力3600なんて、流石明日香様！」

「イエローなんてケチヨンケチヨンにしてしちゃってください！」

同じボートに乗る二人の取り巻きのテンションが最高潮に達する。その興奮した声に後押しされえてか、明日香は若干強めの声でバトルフェイズに入る。

「バトルよ！ サイバー・ブレイダーで、ジェムナイト・アクアマリナに攻撃！！」

『サイバー・ブレイダー』が武器となった右腕を『ジェムナイト・アクアマリナ』に向けて構え、その先端から黄緑色の電撃が迸り発射。『ジェムナイト・アクアマリナ』を直撃。

——グアアアア！

『ジェムナイト・アクアマリナ』は悲鳴を上げながら爆発。守備

表示だった為に戦闘ダメージこそないが、その衝撃はボートの上の理人たちには少々大きく、思わず理人が膝について揺れるボートの上で耐えるほどだった。

「これで貴方のモンスターは0、更に手札も0。勝ち目はないわね」

「そんな事はないよ。予定通りだから」

「なんですって？」

全く動揺のしていない声が、明日香から不敵な笑みを奪う。

その瞬間、理人のフィールドに『ジェムナイト・アクアマリナ』が再度現れ、『サイバー・ブレイダー』に突進。盾で押し飛ばし、二体のモンスターはフィールドから消える。

「な、どうしてサイバー・ブレイダーが……」

「ジェムナイト・アクアマリナの効果が発動したんだ。アクアマリナがフィールドか墓地に送られた時、相手フィールド上のカード一枚を手札に戻すというバウンス効果が」

「なんですって!？」

『ジェムナイト・アクアマリナ』が『サイバー・ブレイダー』に戦闘破壊されて墓地に送られた事により、効果の発動条件をクリア。強制効果によって明日香のフィールドに存在する唯一のカード、『サイバー・ブレイダー』が手札に戻されたという訳だ。

「サイバー・ブレイダーは融合モンスター。融合モンスターは手札ではなく、エクストラデッキに戻る……」

明日香が悔しげに『サイバー・ブレイダー』をエクストラデッキに収める。そしてタイミングを計ったかのように翔が叫んだ。

「そっか！ もう一度サイバー・ブレイダーを召喚するには、もう一度融合しなければならないのか！」

「しかも、明日香の手札は一枚！ モンスターを召喚しなかったからモンスターカードじゃない！」

翔に続いて十代も興奮した様子で叫ぶ。

対して明日香は自分の残った手札を見つめる。だが、そのカードにまだ逆転の可能性は残っている。

「まだよ。私は魔法カード、強欲の壺を發動！」

「流石は明日香様！ ここでドローカードなんて誰も思いもしませんわ！」

「まだ勝利の女神はこちらに微笑んでるわね！」

明日香が二枚のカードをドローする間に、一旦下がった取り巻きの二人のテンションも再び上がる。

「私は、サイバー・チュチュを守備表示で召喚！」

明日香の前に『サイバー・チュチュ』が腕を交差し、膝について現れる。

『サイバー・チュチュ 3 / 地属性 / 戦士族 / 攻1000 / 守800 効果：相手フィールド上に存在する全てのモンスターの攻

撃力がこのカードの攻撃力よりも高い場合、このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる』

「更にカードを一枚伏せて、ターンエン——」

「エンドフェイズ！ リバースラップ 伏せ罨オープン。奇跡の残照！」

「——なっ！ このタイミングで!?!」

「このターン、戦闘で破壊されたモンスター一体を特殊召喚する。再び立ち上げ、アクアマリナ！」

理人の呼びかけに答えるかのように、『ジェムナイト・アクアマリナ』が墓地より再び立ち上がる。

『ジェムナイト・アクアマリナ』 攻撃力1400

「くっ、ターンエンド」

「僕のターン。ドロー！」

デッキからカードをドロー。

「僕は、墓地から魔法カード、マジックジェムナイト・フュージョンの効果発動！」

「墓地から魔法カードを発動ですって!?!」
マジック

「すげえ！ 墓地から魔法を発動できんのか！」

驚愕と感動。対局な反応を示す明日香と十代。そんな二人を無視

して、

「墓地のジェムナイト一体をゲームから除外する事で、このカードを手札に加える事が出来る。墓地はサファイアを除外して、ジェムナイト・フュージョンを手札に加える！」

デュエルディスクの墓地から『ジェムナイト・サファイア』がゲームから除外され、代わりに墓地の『ジェムナイト・フュージョン』が理人の手札に加わる。

「そして、ジェムナイト・ガネットを通常召喚！」

宝石のガーネットの中から輝石の騎士が姿を現す。

『ジェムナイト・ガネット 4 / 地属性 / 炎族 / 攻1900 / 守0』

「更に、伏せ^{リリース}カードオープン！ ジェム・エンハウス！」

伏せられたもう一枚の罨カードが発動する。

「自分フィールド上のジェムナイト一体、アクアマリナをリリースして発動！」

——オオオオオオ！

『ジェムナイト・アクアマリナ』の身体が光り輝き、欠片となつて砕け散る。

「墓地にいるジェムナイト一体を特殊召喚する！ 蘇れ、ルマリン！」

砕け散った『ジェムナイト・アクアマリナ』の宝石の欠片が再び結集。そして今度はイエロートルマリンの結晶となり、その中から『ジェムナイト・ルマリン』が現れる。

「フィールドに二体。まさかまた融合を！」

「でもその前に、アクアマリナの効果が発動する」

理人の言葉に、ハツとする明日香。

「アクアマリナの効果は、フィールドから墓地に送られた時に発動する強制効果。よって、その伏せカードを^{リバー}手札に戻す」

「くっ！」

明日香がデュエルディスクから伏せカードを抜き取り、手札に加える。

「そして、ジェムナイト・フュージョン発動！ 場のとルマリンを融合！」

二体のジェムナイトが宝石に戻り、理人の頭上へ登っていく。そして、二つの宝石が火花を散らしながら回転して擦れ合い、互いに砕け散る。

「輝石と輝石が研磨されし時、新たな輝きを呼び起こす。光り輝く道となれ！」

理人が右手を翳し、同時に砕け散った二つの宝石が一点に集束さ

れていき、やがて一つの宝石となってフィールド上に舞い降りる。

「融合召喚！ 現れよ、ジェムナイト・パース！」

トパースが砕け、その中から黄色い甲冑を身に纏い逆手持ちダガーを両手に所持した輝石の騎士が現れる。

「ジェムナイト・パース 6 / 地属性 / 雷族 / 攻1800 / 守1800 融合「ジェムナイト・ルマリン」+「ジェムナイト」と名のついたモンスター。このカードは上記のカードを融合素材にした融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地に送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える」

「バトル！ パースでサイバー・チュチュを攻撃！」

「ジェムナイト・パース」が両手に持つ逆手のダガーを振り上げて「サイバー・チュチュ」にダッシュ。

「ジェムツインブレイド！」

——ハアアア！

二つのダガーで交互に切り裂く。「サイバー・チュチュ」は悲鳴を上げながら破壊される。

「そして、パースは戦闘で破壊し墓地に送ったモンスターの攻撃力分のダメージを与える。ジェムフラッシュ！」

——フンッ！

「くう……！」

『ジエムナイト・パーズ』の身体から放たれた黄色い閃光が明日香のライフポイントを削る。

明日香 LP1900 - 1000 = 900

「そして、パーズは一度のバトルフェイズ中に二度攻撃する事ができる。これでトドメ！ リバース・ジエムブレイド！」

『ジエムナイト・パーズ』が明日香の前に立って左手を引き、思いつきその左手に持つダガーで斬り付ける。

——ハアア！

「キャアアア！」

明日香 LP0

「デュエル・エンド。僕の勝ちだ」

理人は口癖の様にそれを口にすると、深々と溜息を吐いた。

「すっげえ！ すげえよ理人！ お前デュエルもすげえ強いんだな！」

「ま、まあまあだよ」

「そんな事ないッス！ アニキの次ぐらいに凄いッス！」

と十代と翔が褒めちぎるが、理人の中ではレイが若干苛立っていた。

（十代の次だとお？ 雑兵が何を分かったような口をききやがる！
殺されてえか！）

「あ、あれ？ 何故か悪寒が……」

（ま、まあまあ。落ち着いて）

と、理人が今にも人格交代してきそうなレイを宥めていると、いつの間にか明日香たちが近づいて来ていた。

「いいデュエルだったわ。久しぶりに熱くなったし」

「あ、こちらこそ。結構ギリギリでした。因みに最後に伏せたカードは、攻撃反応型の罠トラップですね」

理人がそう尋ねると、明日香は一瞬きょんととして、次いでやれやれと肩を竦めてデュエルディスクからカードを抜き取る。

「セットしたカードはこれよ」

そう言って見せてきたのは、通常罠の『聖なるバリアーミラー・フォースー』。相手の攻撃宣言時に、相手の攻撃表示のモンスターを全て破壊する攻撃反応型の罠だ。

「よく分かったわね。ちょっと自信はあったんだけど？」

「あの状況でカードをセットするとしたら、ブラフか起死回生の一手のどちらか。でもドローしたモンスターとカードを両方出したって事は、相手に攻撃を躊躇させないための布石」

つまり、セットされたカードも召喚されたモンスターも、両方とも明日香にとつてはキーカード。『サイバー・チュチュ』は壁として次ターンへの繋ぎ、『聖なるバリアーミラー・フォース』は理人のモンスターの全滅。どちらを残しても厄介な事に変わりはないあのターンで決めなければ明日香は何らかの手段で逆転を決めていただろう。

だからこそ、理人はジェムナイトをドローした瞬間から、この方法を取ったのだ。本当ならば融合する必要はなかったが、そこは理人も熱くなっていたという事なのだろう。何も無い事がわかっていたからこそその融合なのだ。

「なるほど。完敗だわ」

理人の解説を聞いた明日香は、納得したというのを首を縦に振って表現する。

「それじゃ、約束通り翔は連れて帰るぜ」

「ええ。この件は黙っててあげる。でもここまで手を読まれてると、さすがにショックだわ」

「そんな事ねエよ」

溜息交じりに呟いた明日香の一言に、十代が返した。

「え……？」

「オレは見てただけだけどさ。あんたが強いつてのはよく分かったよ」

「……………」

「今日はもう帰るけどさ、今度はオレとデュエルしようぜ」

ニカツと笑って言う十代に、明日香もフツと笑みを浮かべて返す。

「そうね。いつかデュエルしましょ」

「それじゃ……………」

十代はゴホンと咳払いし、爽やかな笑顔で言った

「ガッチャ！ 二人とも、良いデュエルだったぜ！」

「なんでアニキが言うのさ？」

「いやー、何か言わねえとスツキリしなくてさー」

理人たちは、そんな会話をしながらオールを漕いで自分たちの方がある女子寮の反対岸に向かっていった。

因みに。

「ムムム、遊城十代！ 今度こそ貴方をギャフンと言わせてやるノ

「ネ！」

今回、翔が女子寮に行つて覗き疑惑を受ける事となつた真犯人であるクロノス教諭がウエットスーツを着て湖に潜り、明日香と理人のデュエルを見守っていたのであつた。

TURN - 03 エトワール・サイバー（後書き）

次回 TURN - 04 融合封じ！？ 三沢VS理人

理人

「え？ 月一テストって寮内のメンバーでやるの？」

三沢

「ああ、そうらしいな」

十代

「え？ オレの相手は万丈目だって？ おっしやあ！ 今度こそ決着付けようぜ！」

理人

「大丈夫なのかな？ 十代君」

三沢

「理人。一番君の心配してる場合じゃないぞ？」

理人

「え？」

三沢

「君の相手はオレだ！」

次回 TURN - 04 融合封じ！？ 三沢VS理人

レイ

「ここまで追いつめた褒美だ。見せてやるぜ！ ジェムナイトの本当の力を！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3524y/>

遊 戯 王デュエルモンスターズGX †輝石の騎士†

2011年12月3日21時48分発行